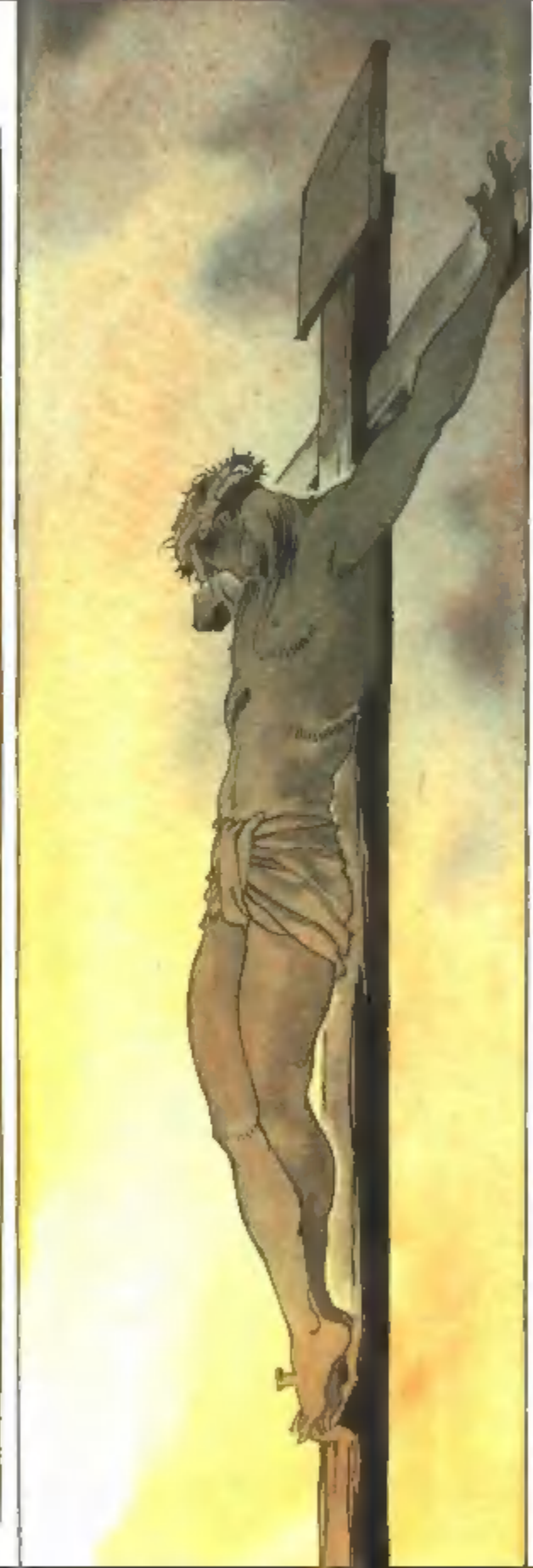
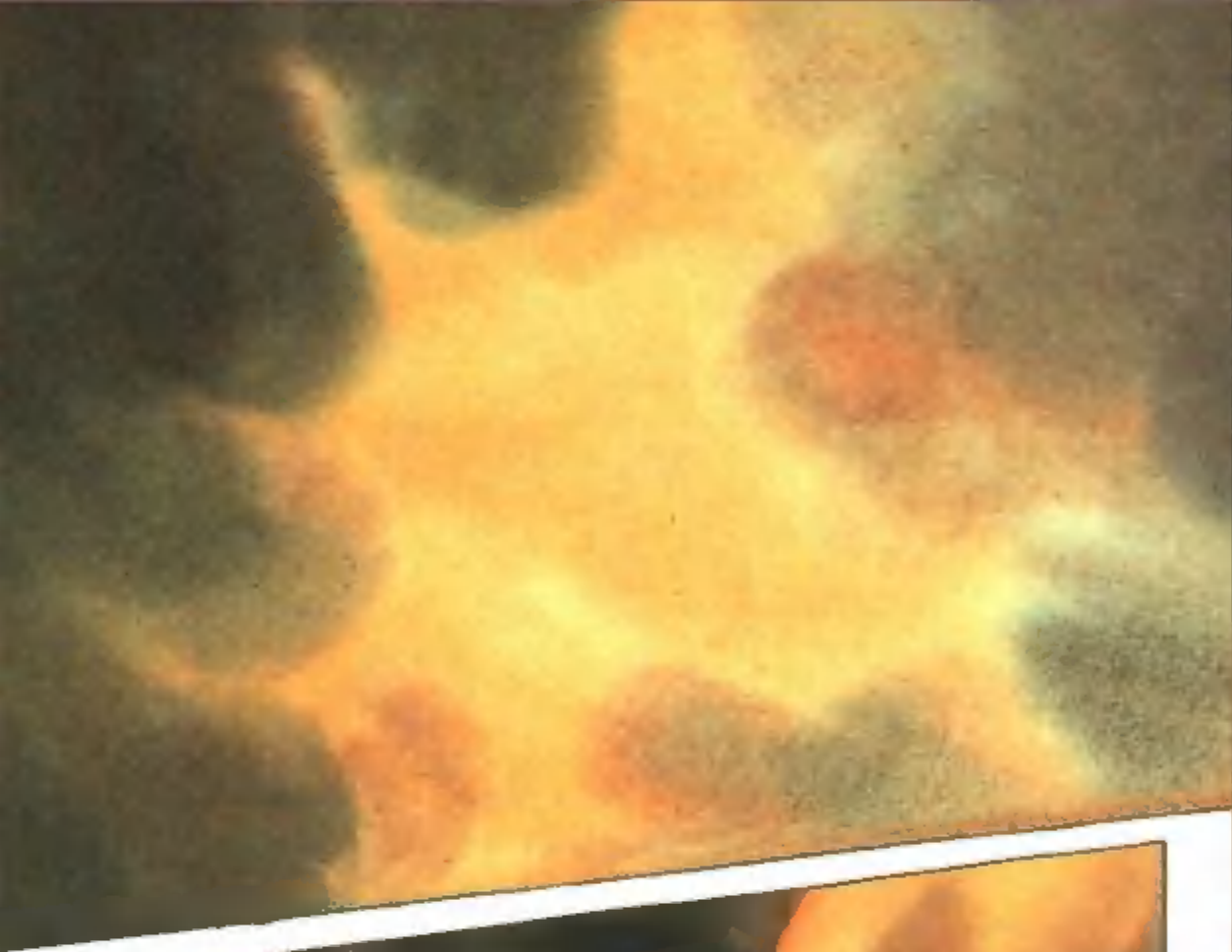
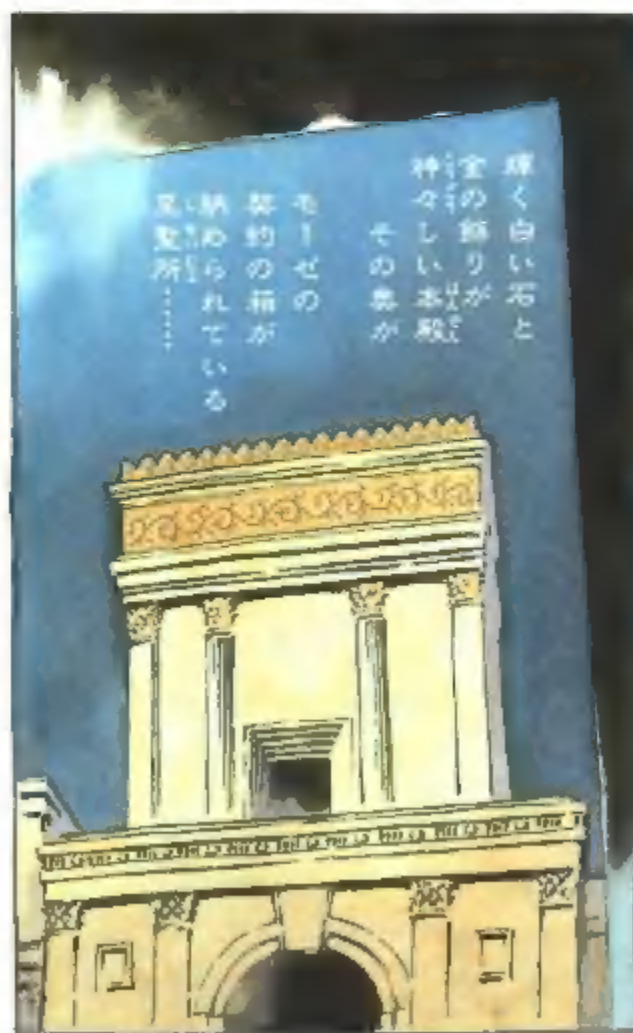
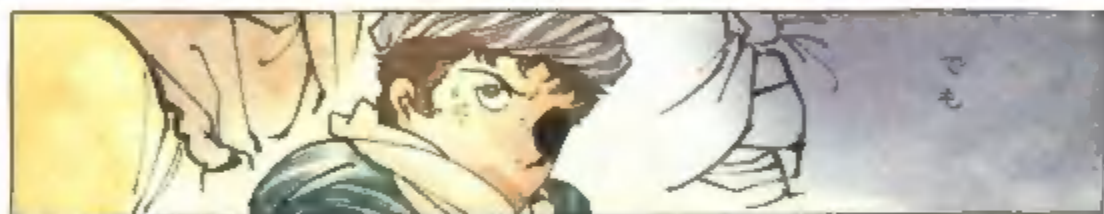
イエス
後編
安彦良和
Hic est Jesus Rex Judæorum
JESUS
NHK出版

イエス
[後編]
YOSHIKAZU YASUHIKO
安彦良和
JESUS
NHK出版

イエス｜後編｜目次

※本書の中で、聖書より引かれた箇所がある場合、
✝印を付け、欄外にその出典箇所を明記した。

イエス時代のエルサレム

ベテスダの池
アントニアの要塞
ゲッセマネ
美しの門
(悲しみの道)
ゴルゴダの丘
ビア・ドロローサ
神殿
ヘゼキヤの池
王家の柱廊
(ヨシュアの落ちた池)
ヘロデ王の宮殿
カヤパ邸
ダビデの町
ケデロンの谷
シロアムの池
ヒンノムの谷

死んで……
しまったのか……

何の奇跡も
起こさず
まるで

ただの人の
ように………

ウン
だああ

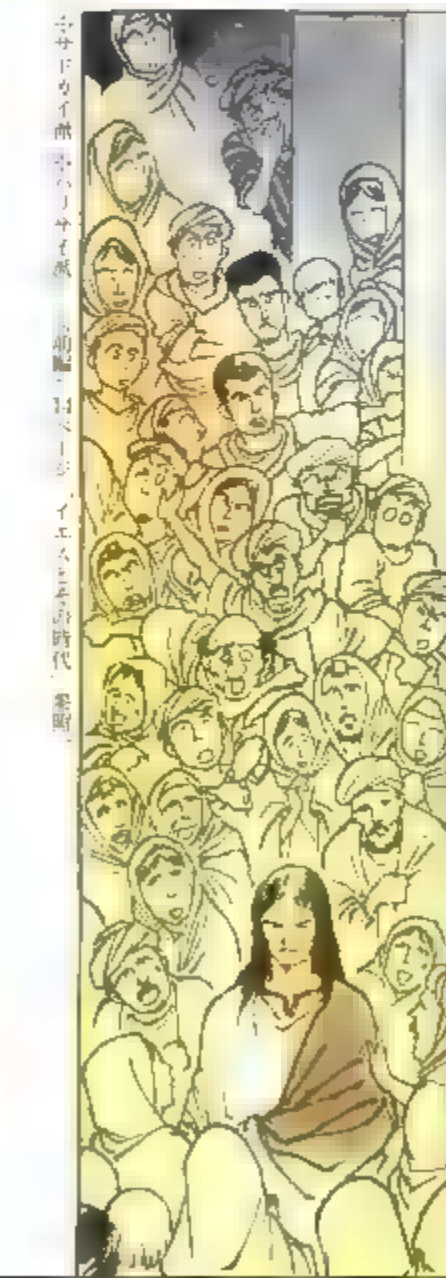
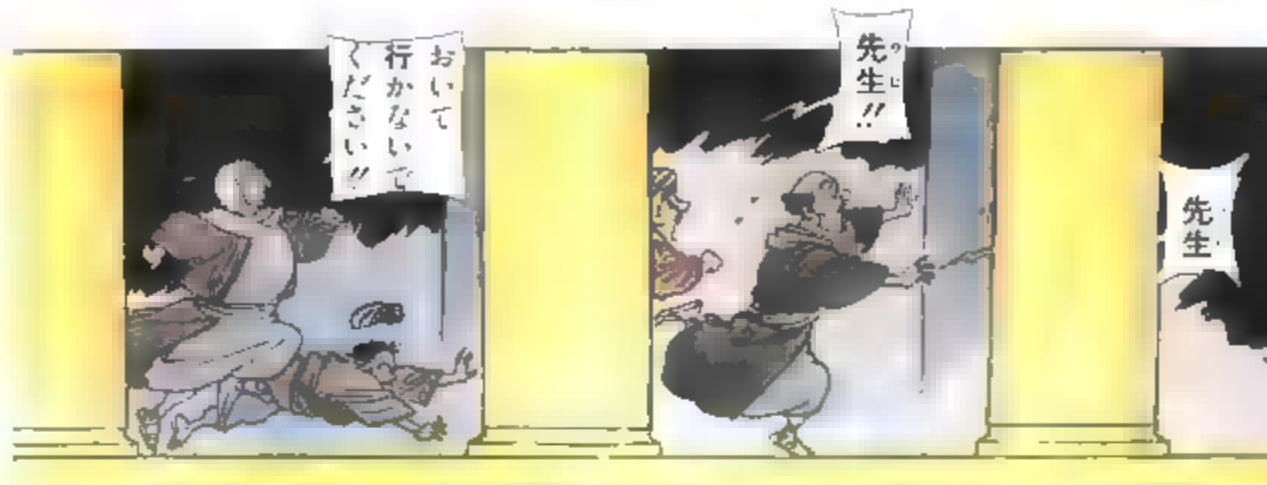
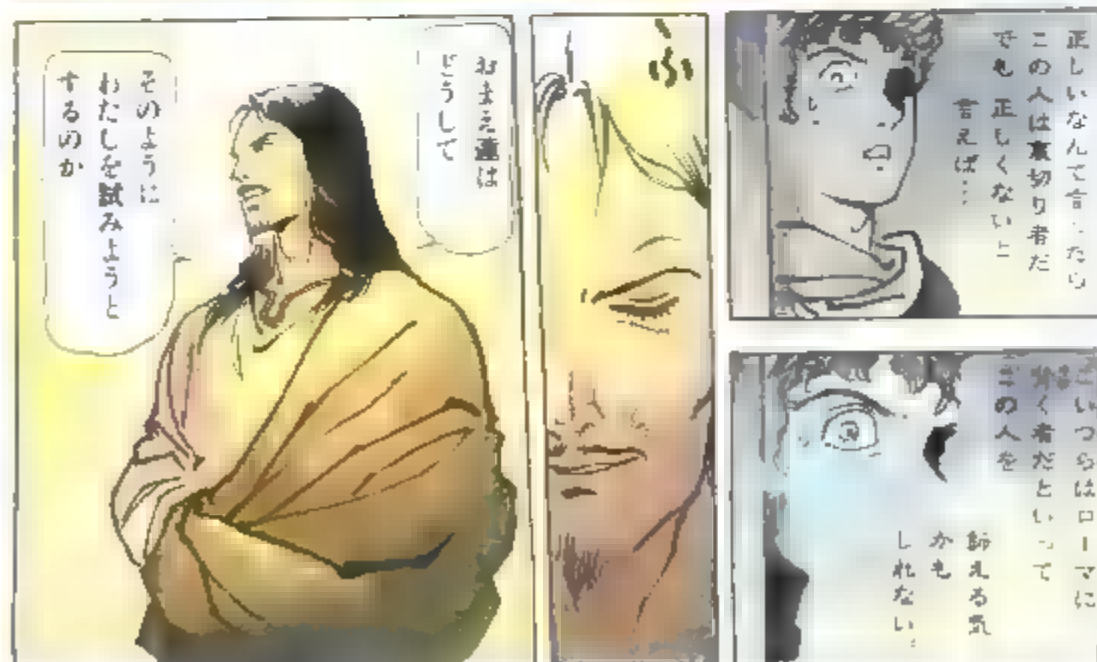
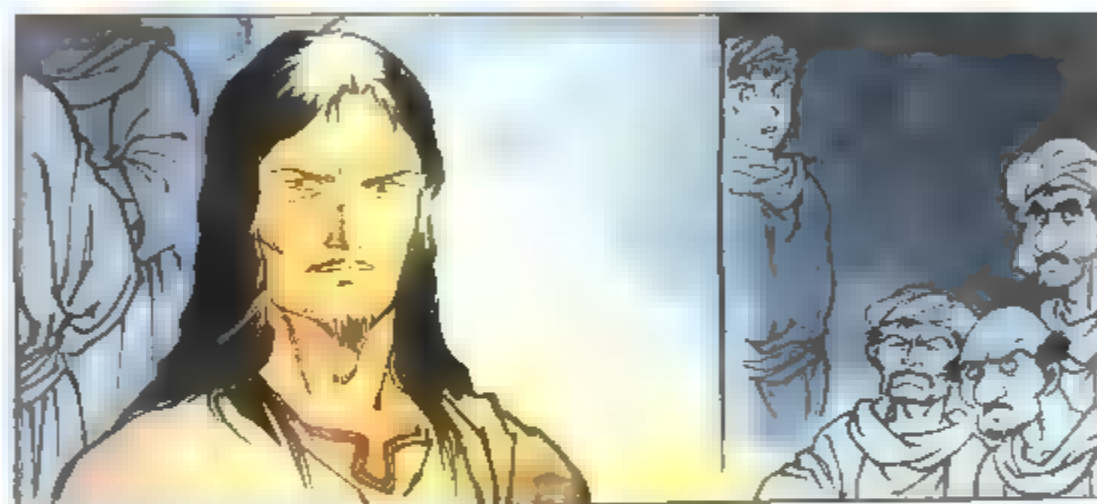
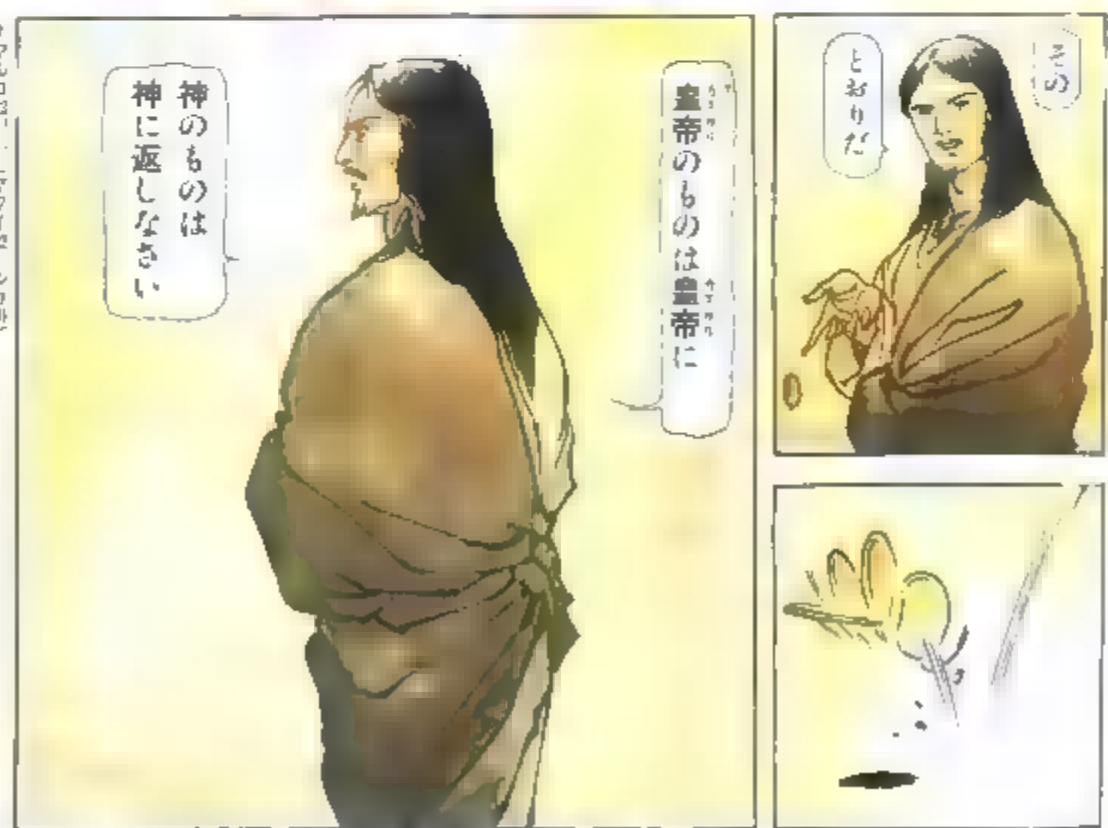
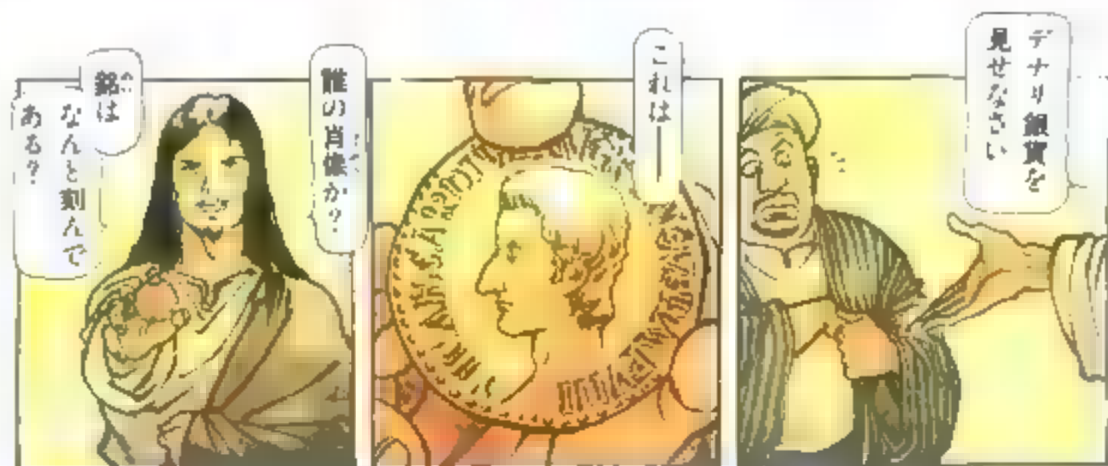
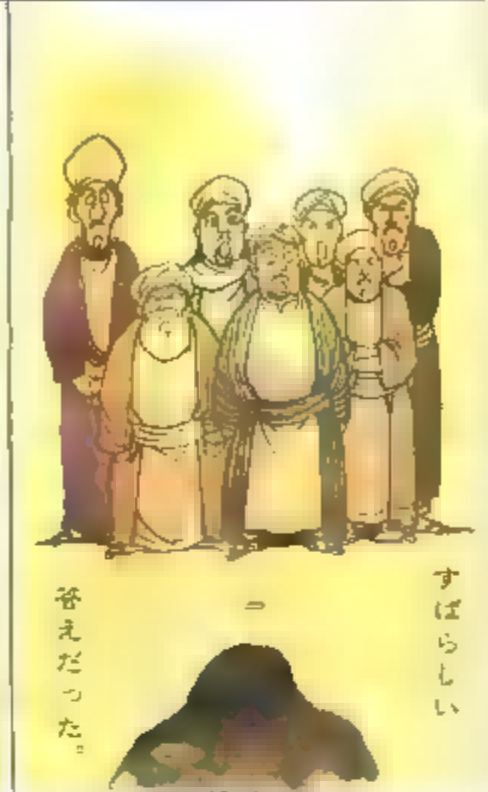
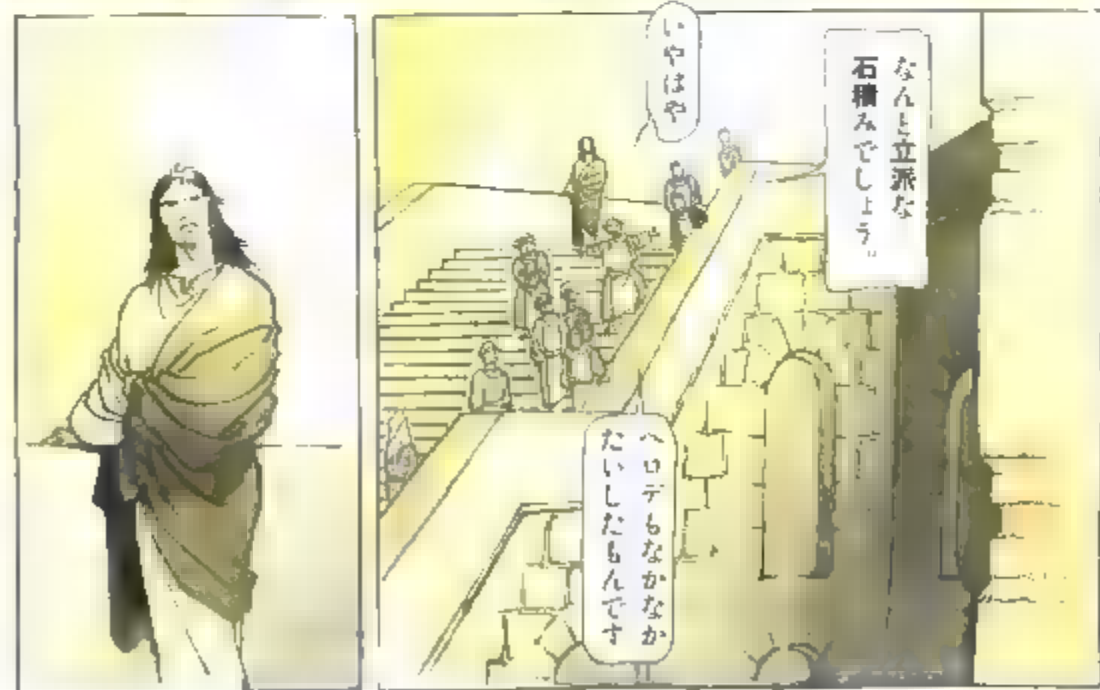
第5章

仮庵(かりいお)の祭

エルサレムの神殿は
大きくて 立派で
おごそかな建物だった。

むぎゅ!!
あ
お!
お.お.
こっちだ!!
お・お〜〜!
ヨシュア!
キョロキョロするな!
田舎モンめが!
先生はむこうだぞ!
はぐれてどうする!
人 人
人…
すごい人だ……
全ユダヤから
いや
世界中から集まって来ている
ユダヤ人の巡礼者達
その中で
イエス様は教えを説かれた。

※アブラハム──ユダヤ人の祖とされる伝説上の人物。メソポタミアを出てユダヤの地を拓いたとされる。

※ガリラヤ――旧約聖書ではメシアはダビデの子孫から出、ベツレヘムに生まれるとされていた。したがってマタイ伝、ルカ伝はその立場をとる。なお、この前後のやりとりはヨハネ伝による。

※サドカイ派・※パリサイ派…前編・14ページ「イエスとその時代」参照

＊マルコ12・（マタイ22 ルカ20）

すばらしい
答えだった。

でも
イエス様が
いつも
こんな
ふうに
キレイに
相手を
やりこめて
いたわけで
はない。

時々は その答えは
苦しげで
きわどい
言い逃れの
ように聞こえた。

御自分が何者なのかと
いう問いに対する答え
なんかがそうだ。
もちろん
自分は救世主だ
などと声高に言えば
神を冒瀆したということにされ
祭司達に殺されてしまうかも
しれない。
しかし それだけではなく

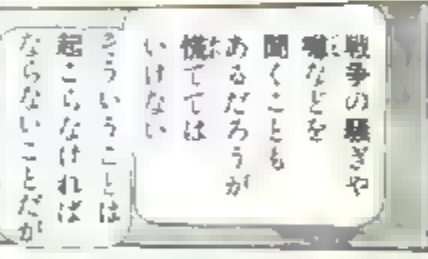
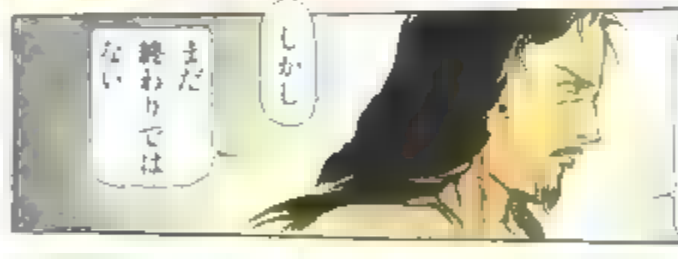
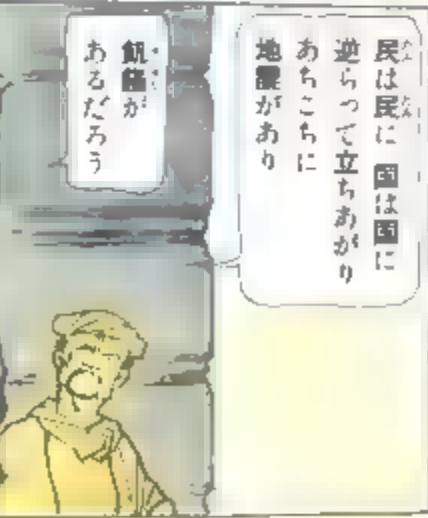
なんだか
自身でも
自分が誰なのか
何者であるかが
判らないでいるかの
ように

そんなふうに
見えたりもした。

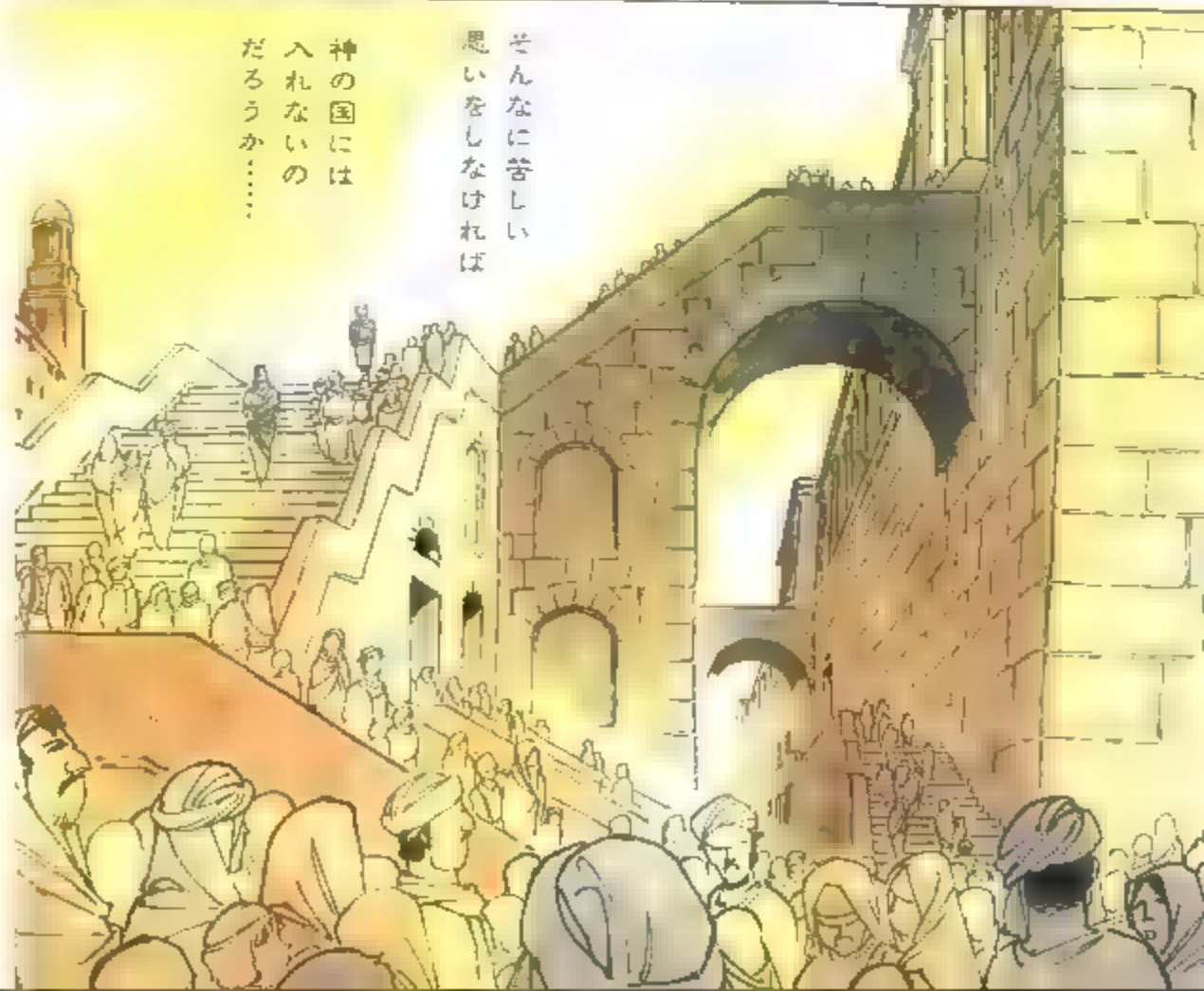
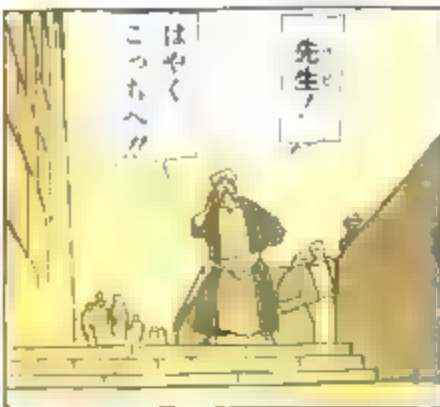
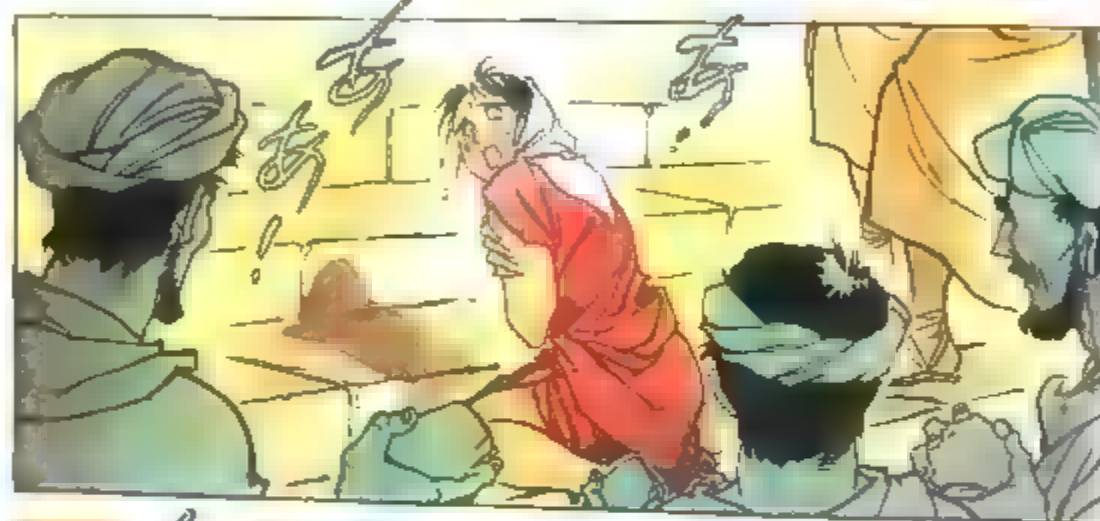
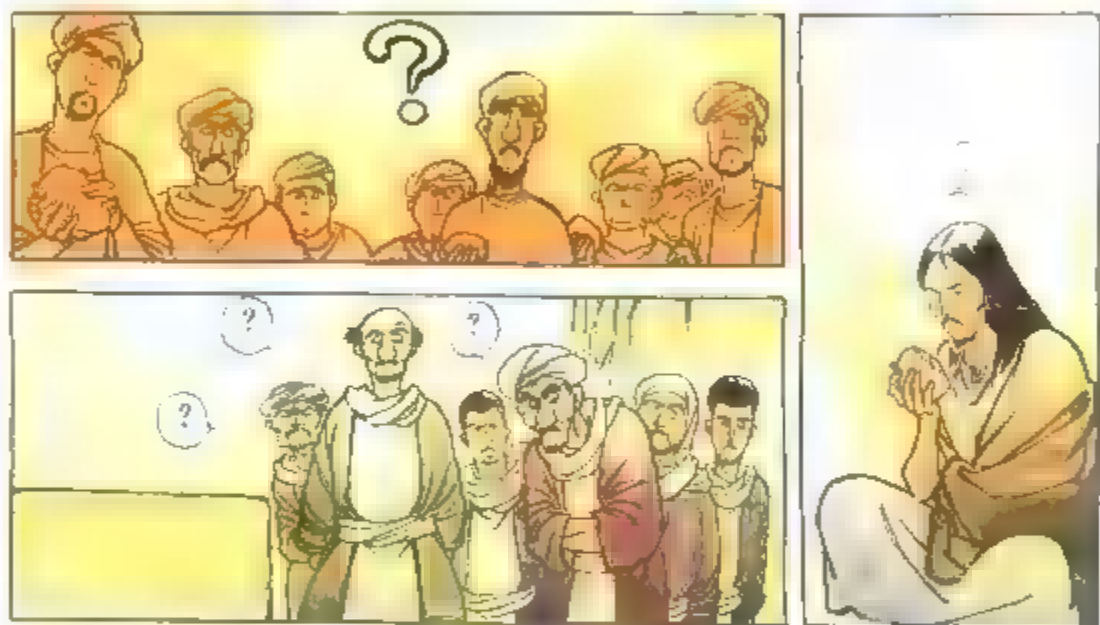
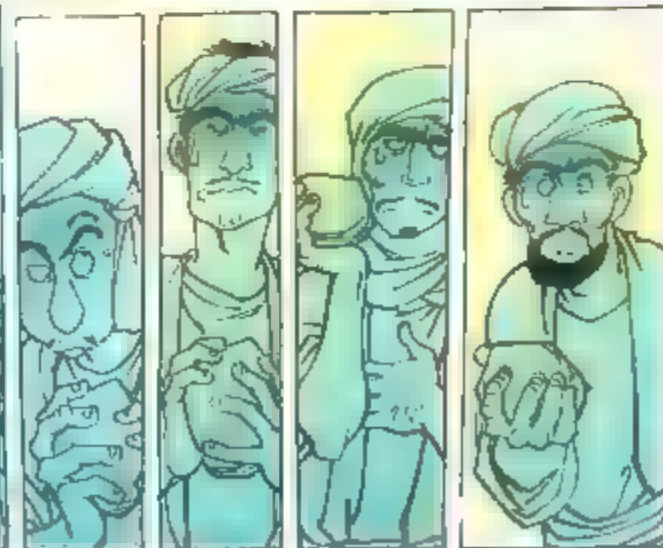
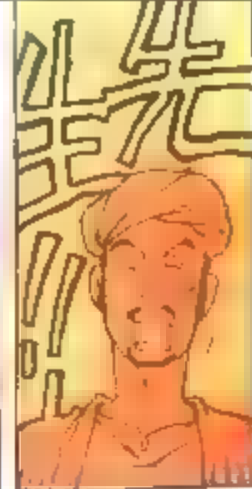
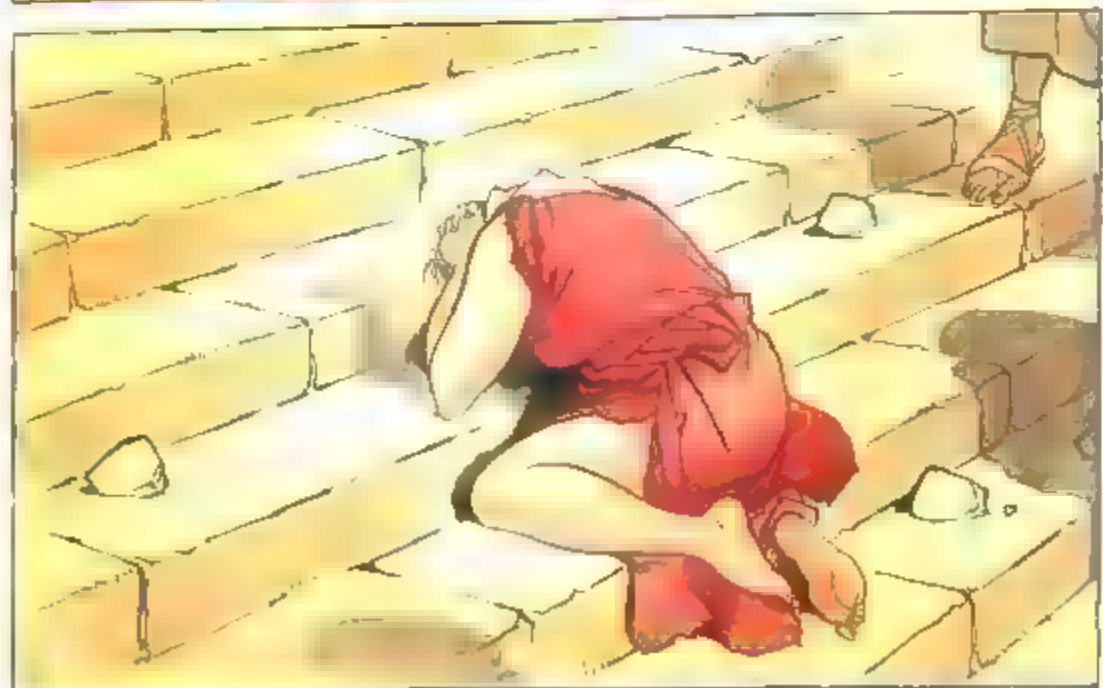
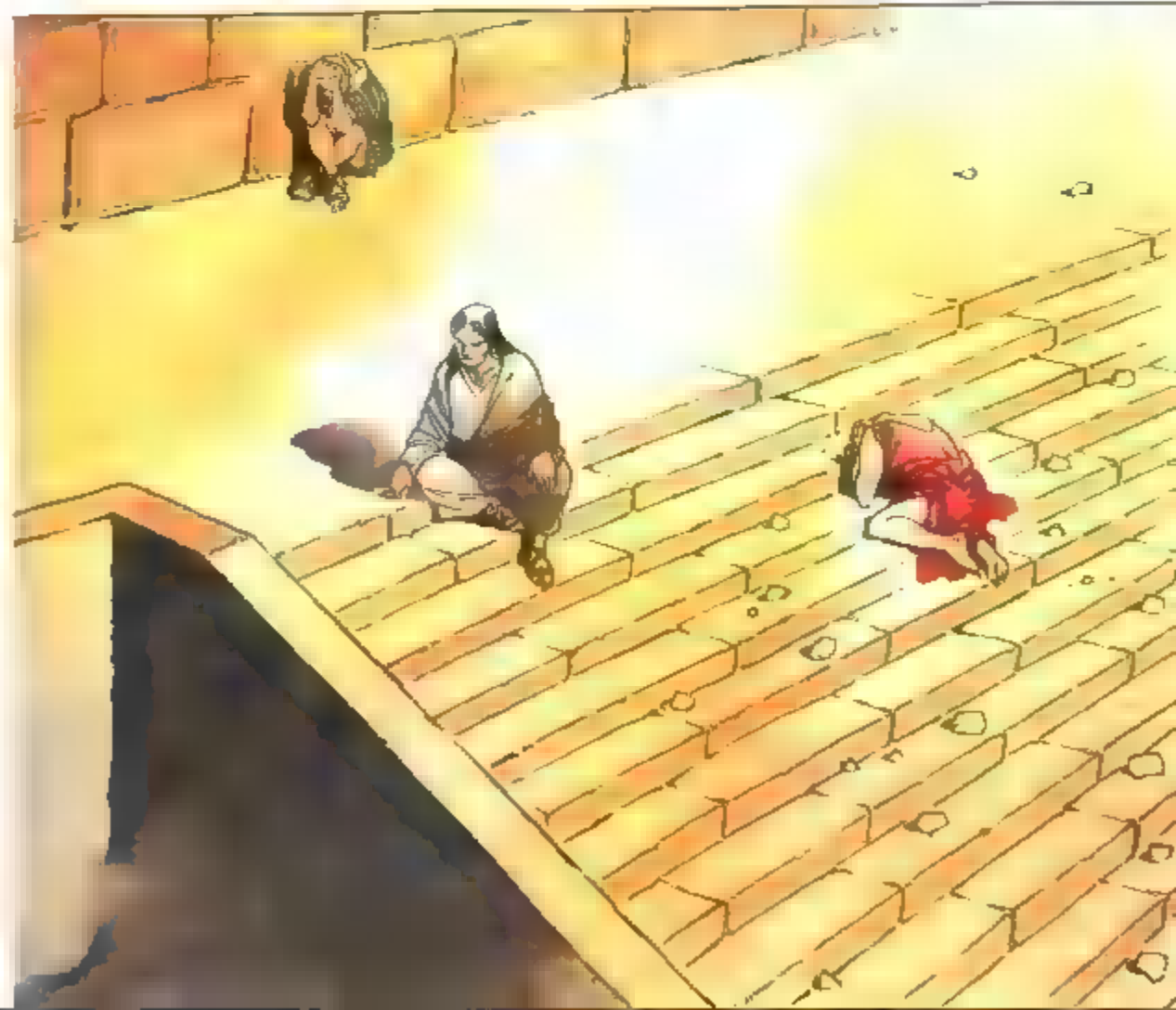
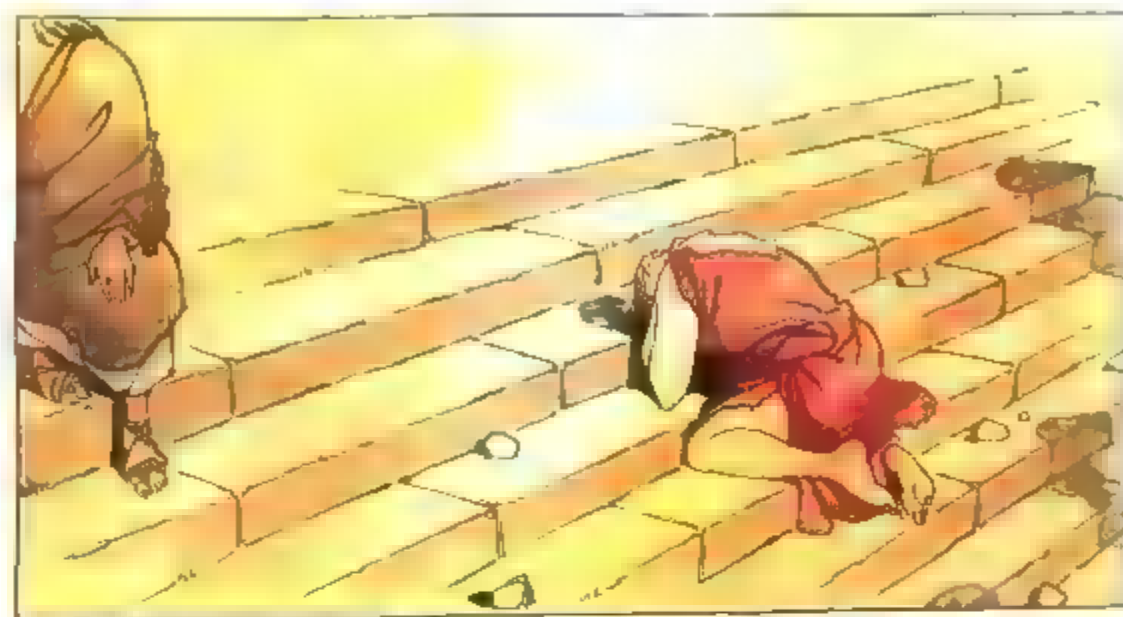
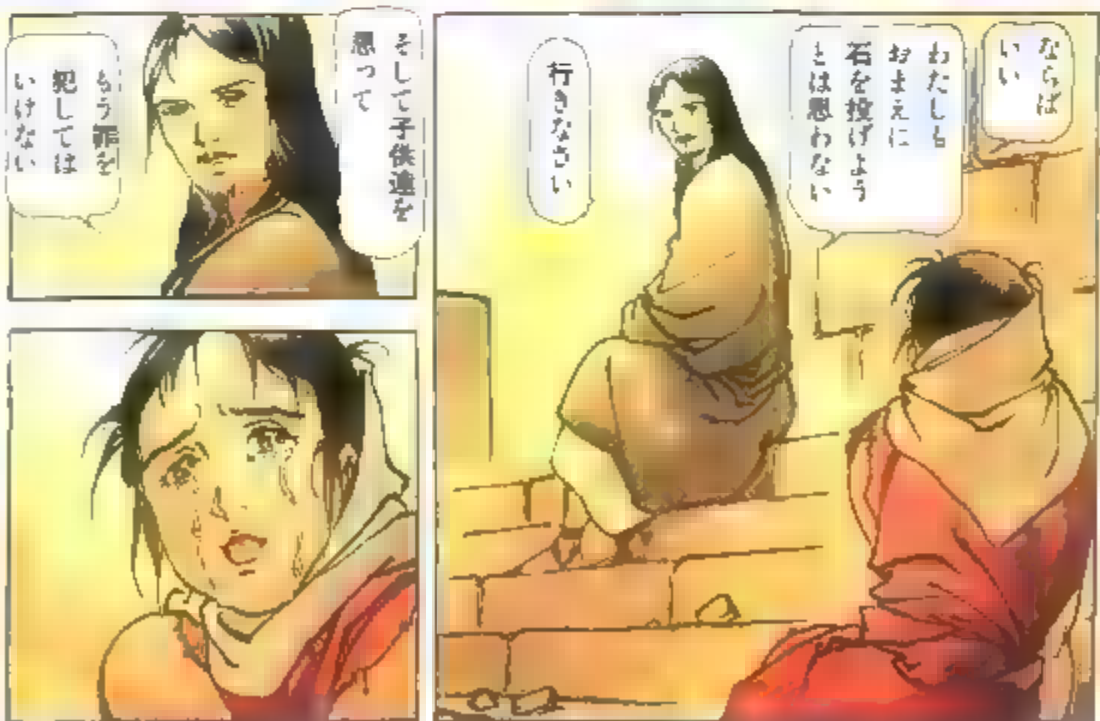
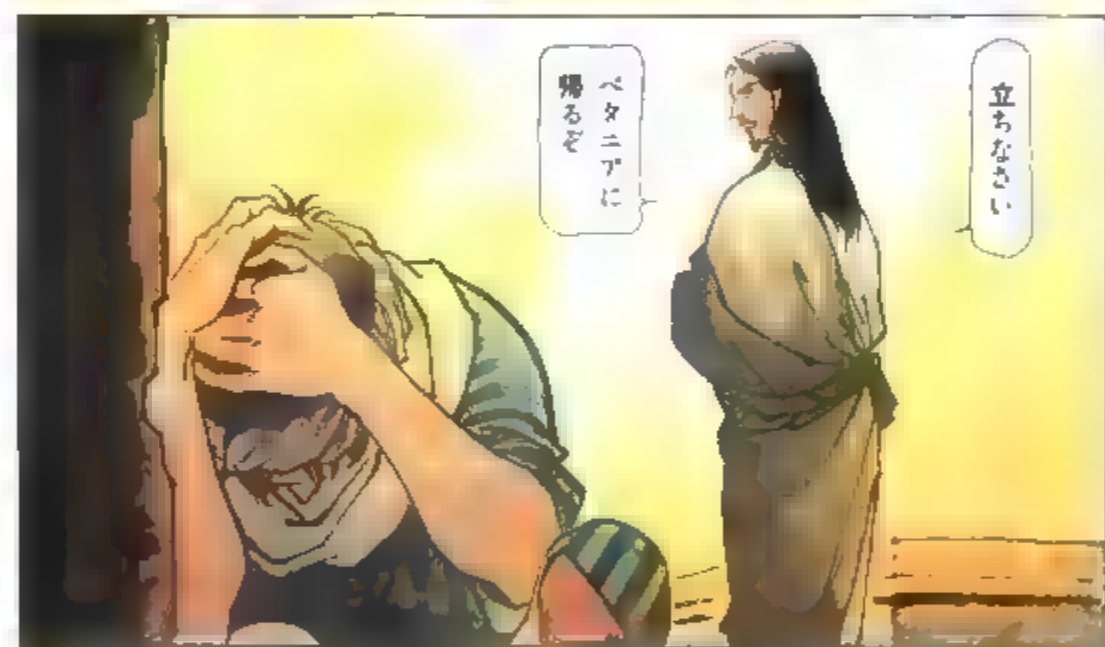
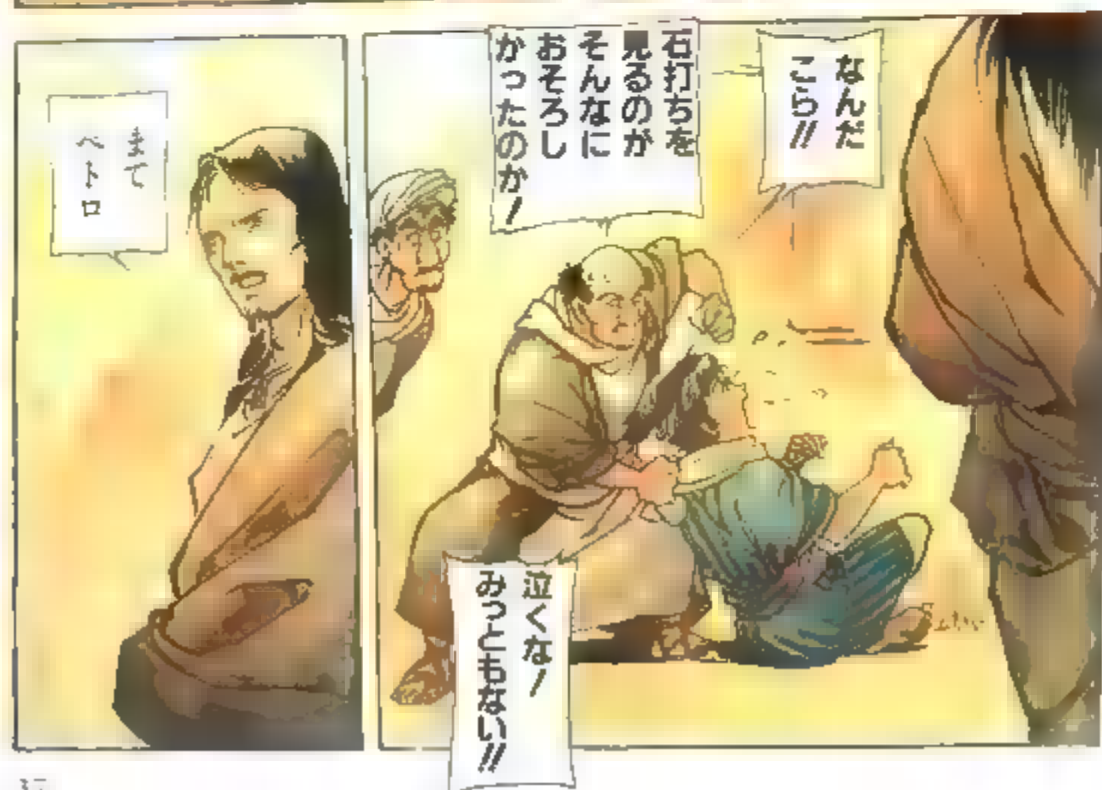
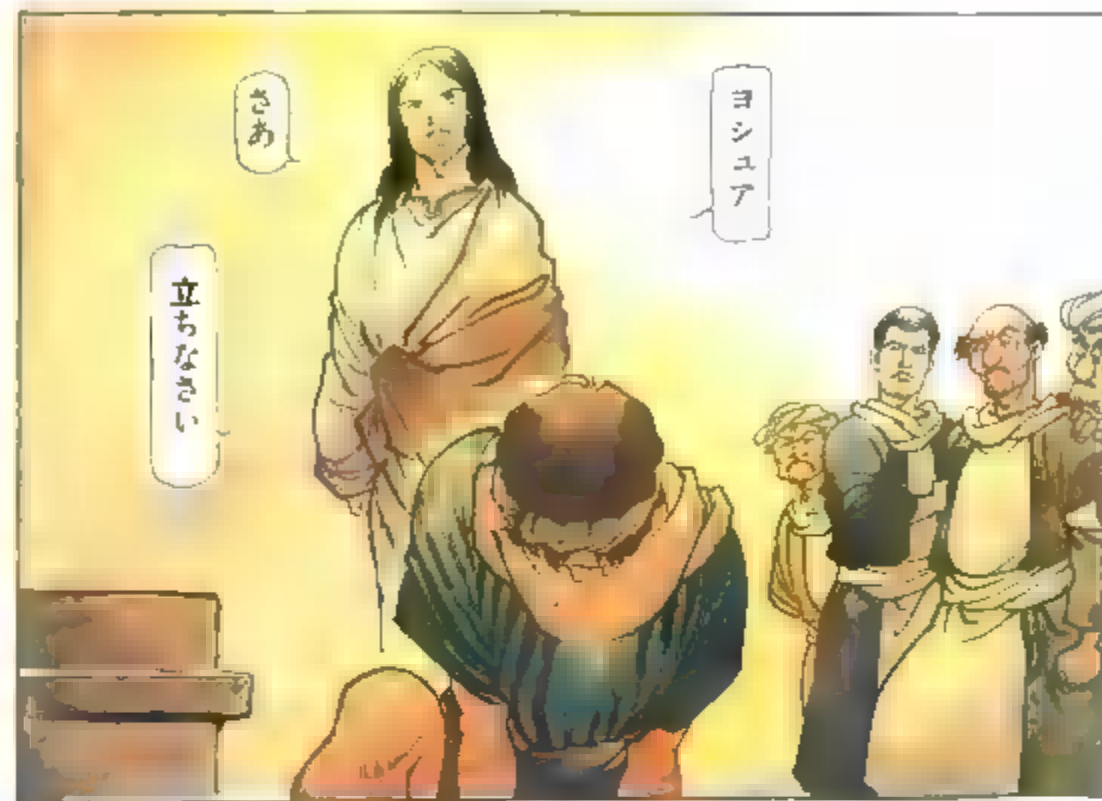
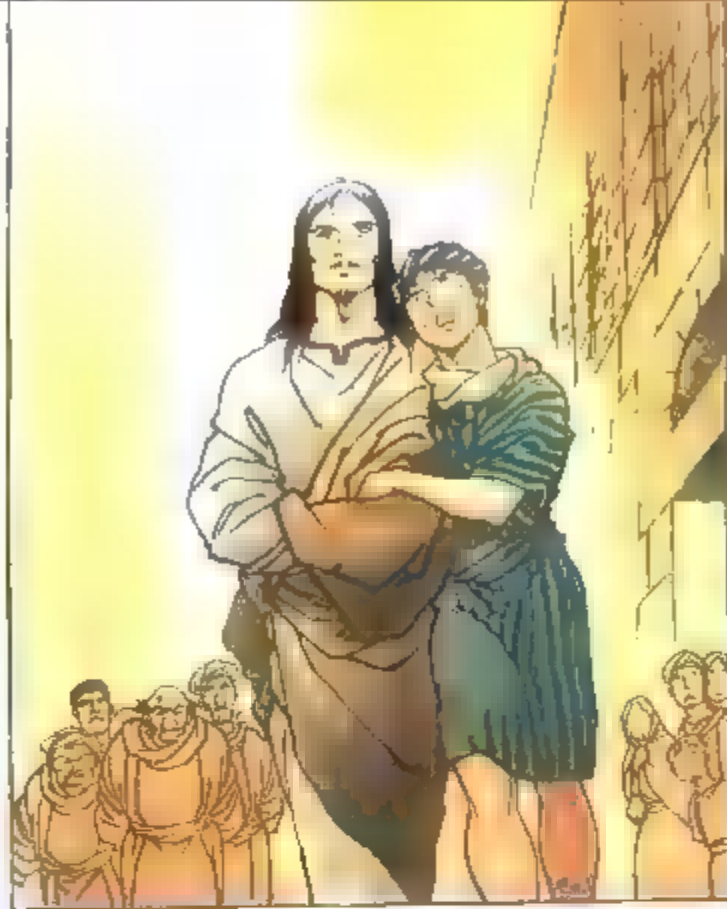
先生！
見て
ください！

なんと立派な
石積みでしょう。
いやはや
ヘロデもなかなか
たいしたもんです

†マルコ13（マタイ24 ルカ21）

†マルコ13（マタイ24 ルカ21）

だが それは
なんという おそろしい 預言 だろう……
産みの苦しみの始まりにすぎない
救世主が現れて 神の国が来ると いうのは そんなおそろしい ことなのだろうか。

そんなに苦しい 思いをしなければ 神の国には 入れないの だろうか……

先生！ はやく こっちへ!!
先生！
こいつは 姦通の現場で おさえられた 女です！

どうか
おなさけを……
あああ

メシアと言われるほどの偉い先生なら
当然模範を示さなければなりませんな
さあ
お手ごろな石です
あなた様から
どうぞお手本を
さあ!!

あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ

……
先生
?
?
?
?
…
先生
何をしているんです!?

先生!!
何をしてるんです！
早くその石でこの女を！

＊ヨハネ

おまえ達のうち罪を犯したことのない者が
まずこの女に石を投げなさい

……

ゴト

女よ
あの者達はどうしたのだ？

誰も
おまえを罰しはしなかったのか？

……

……

ならばいい
わたしもおまえに石を投げようとは思わない
行きなさい

そして子供達を思って
もう罪を犯してはいけない

ヨシュア

どうした!?

立ちなさい
ベタニアに帰るぞ

……

……
……

なんだこら!!
石打ちを見るのがそんなにおそろしかったのか!
泣くな!みっともない!!
まてペトロ

ヨシュア
さあ
立ちなさい

オレは…
バカでした
オレは……
かあさんを…
わかっている
今の涙でおまえは
赦された
……

オレはこの時
赤子になったような
気がしていた。

イエス様の
赤子だ

オレは泣きながら
イエス様の腕に
すがっていたけれど
本当は
その
懐に
抱かれている
ような
気持ちだった。

イエス様に
つきまとって
いた。

だから危険だと
思われたのか
それとも

バラバ

オレ達はそれから「川」へ出た。

あ。
あの
あの…

あの
先生
ここは
先生がヨハネ様から洗礼をお受けになった所なんですよね？

オレ
いや…
わたしにも洗礼を授けてください！
寒くたってかまいません！

ヨハネは水で洗礼を与えた
わたしは
聖霊で与えよと言われている

ヨシュア
おまえはこのわたしを
何だと思うか
えっ?
えっ?

あ
あなたは
救世主ですっ!!

ペトロもアンデレも
ヤコブもそう言った……

だがこのことは
誰にも言ってはいけない!

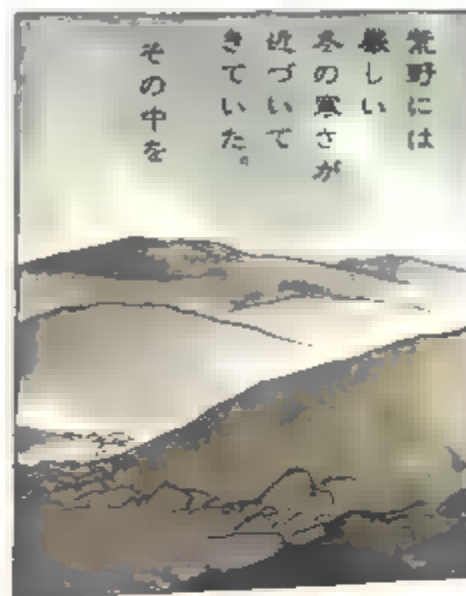
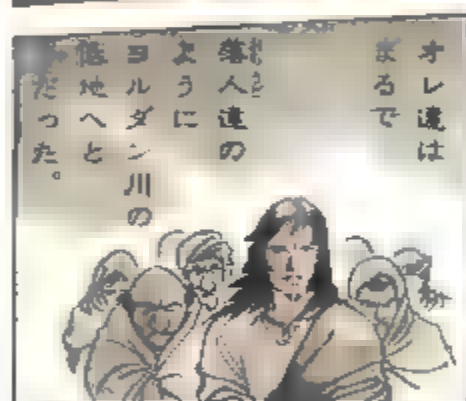
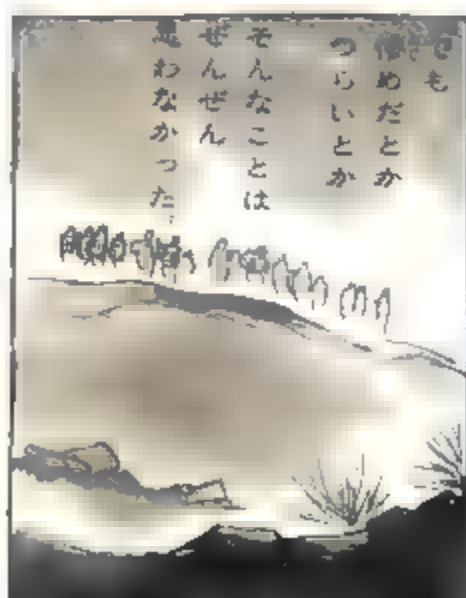
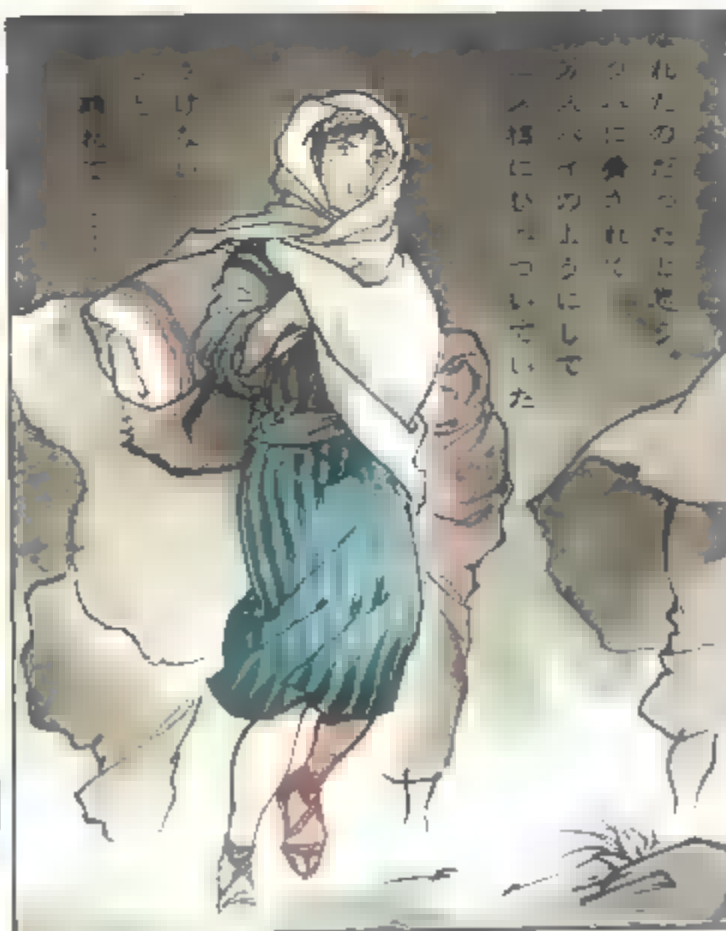
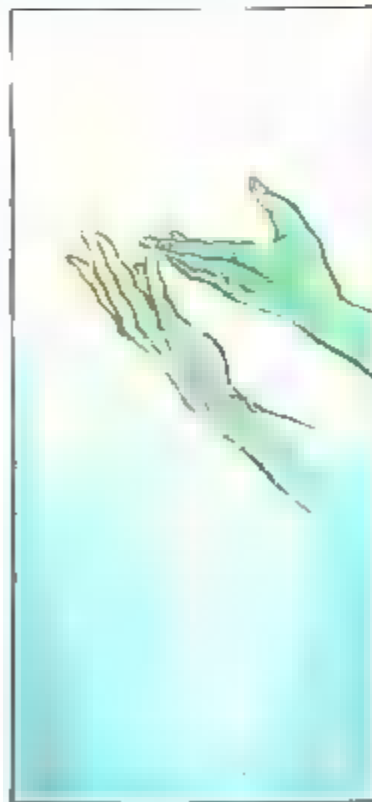
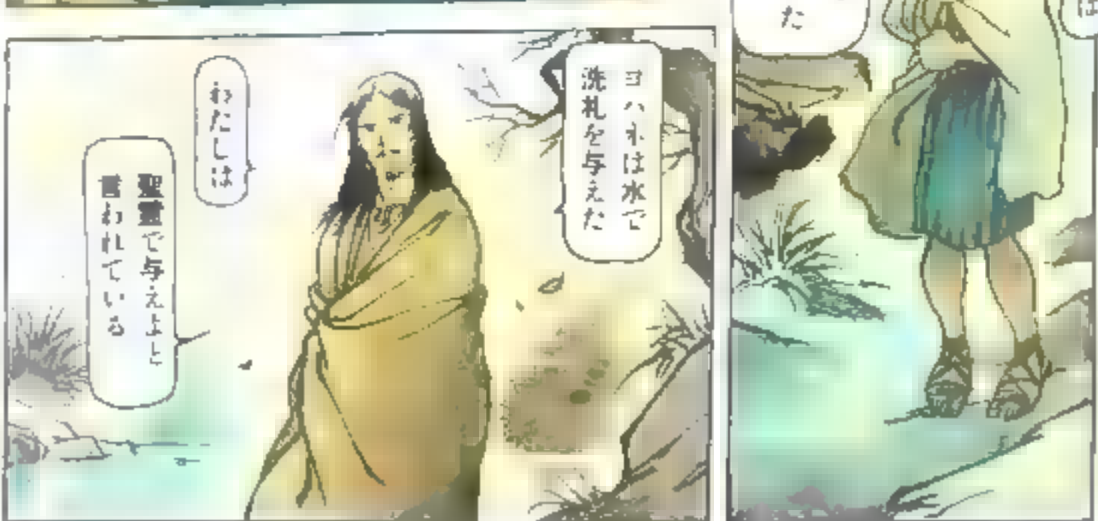
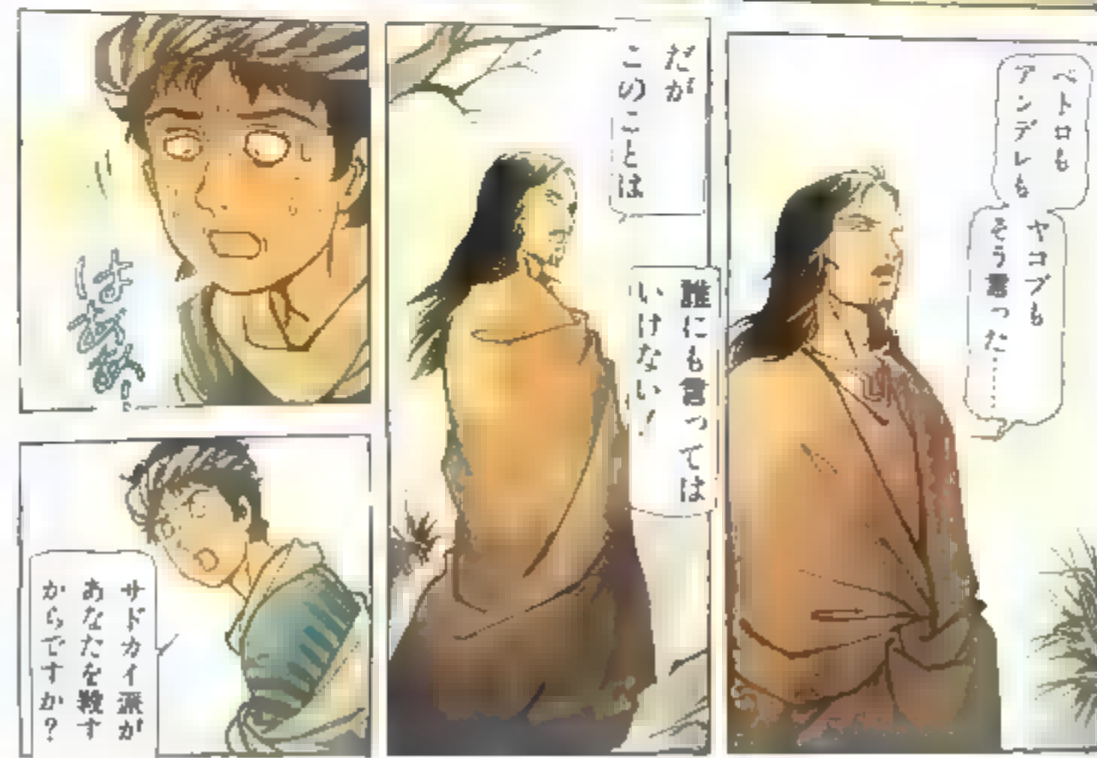
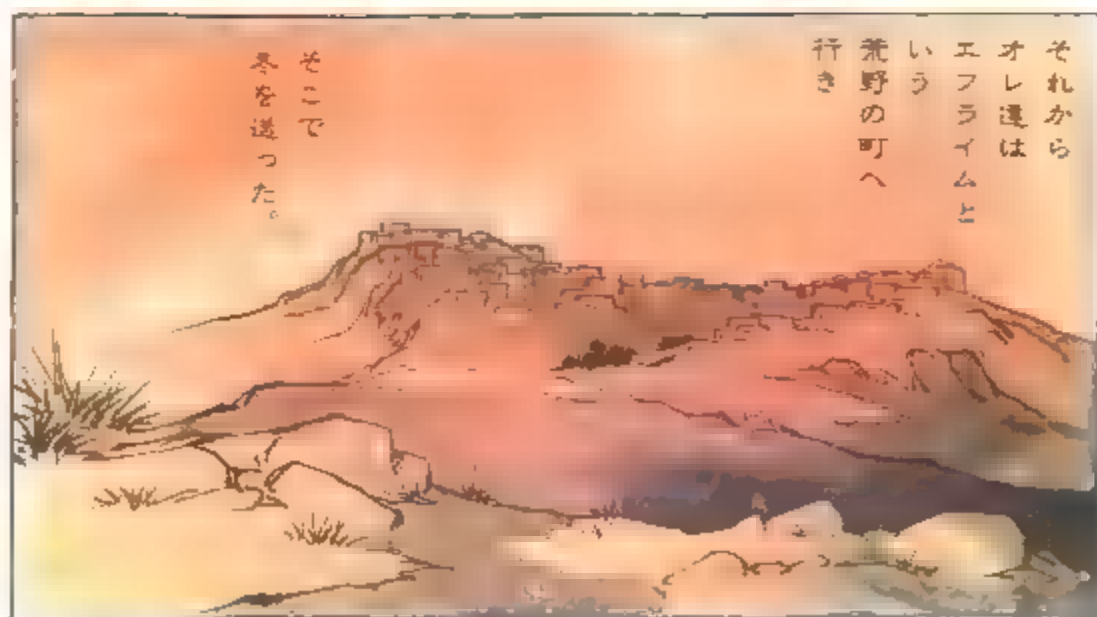
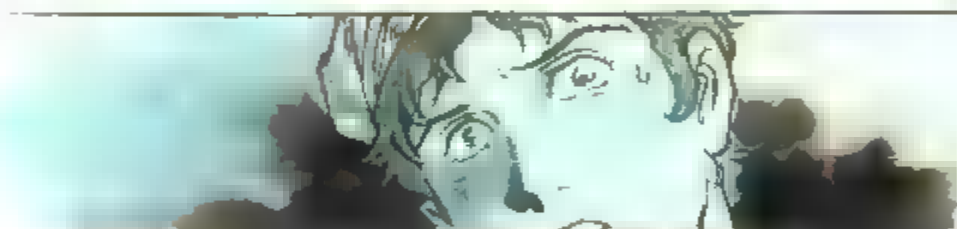
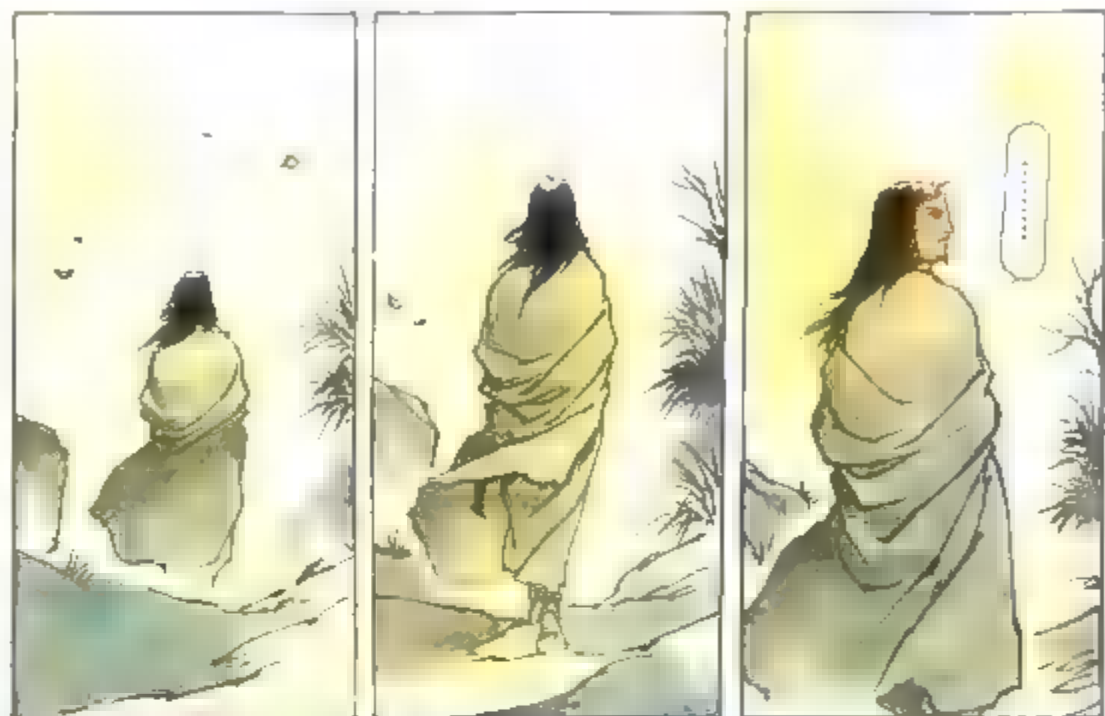
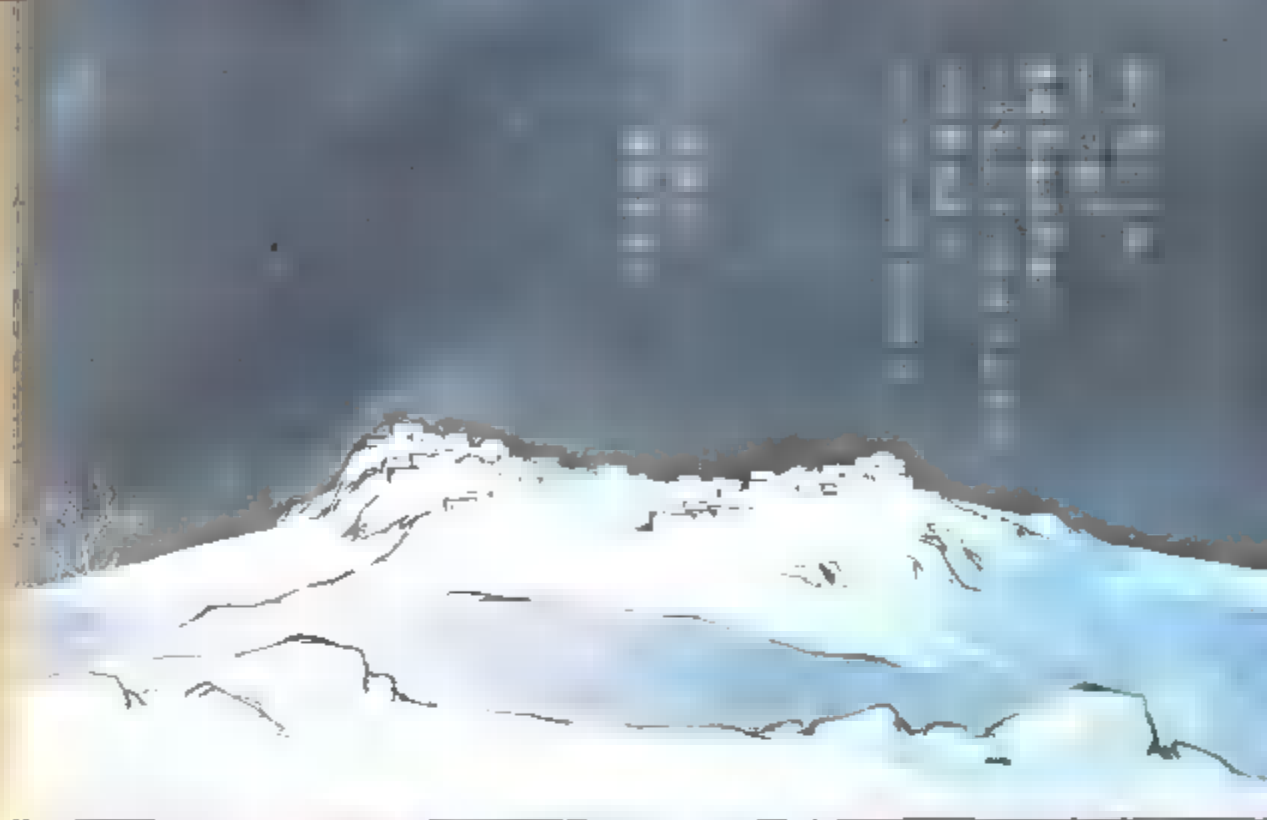
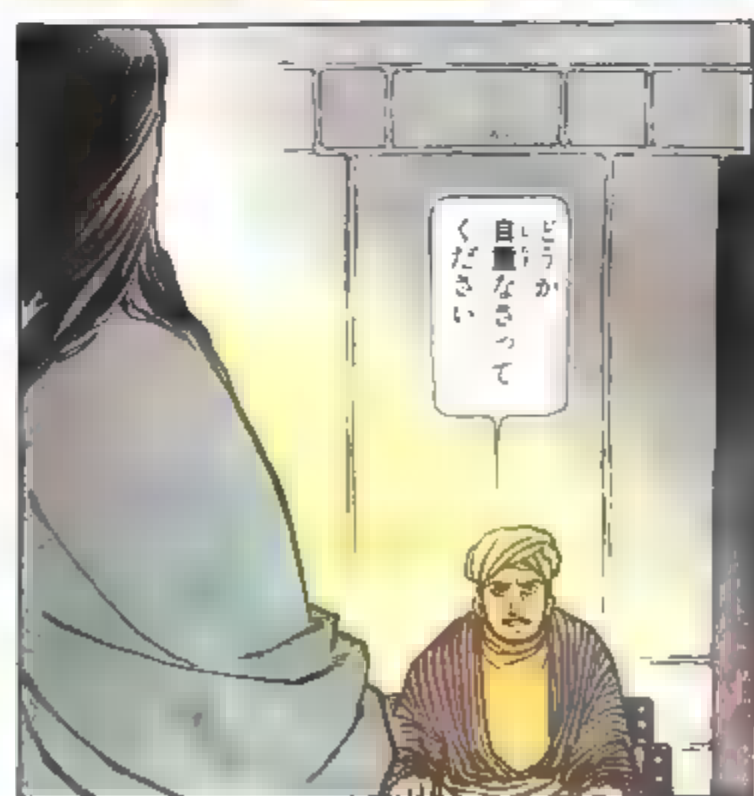
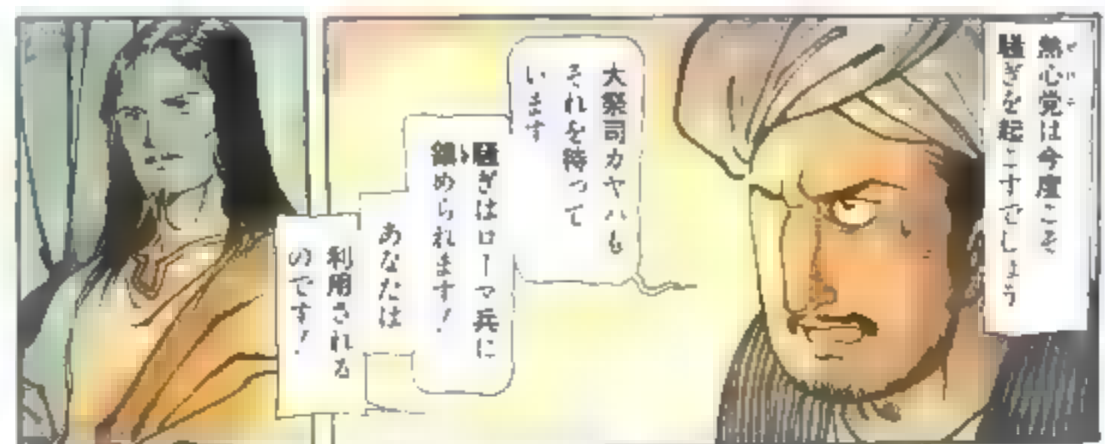
サドカイ派があなたを殺すからですか?

……

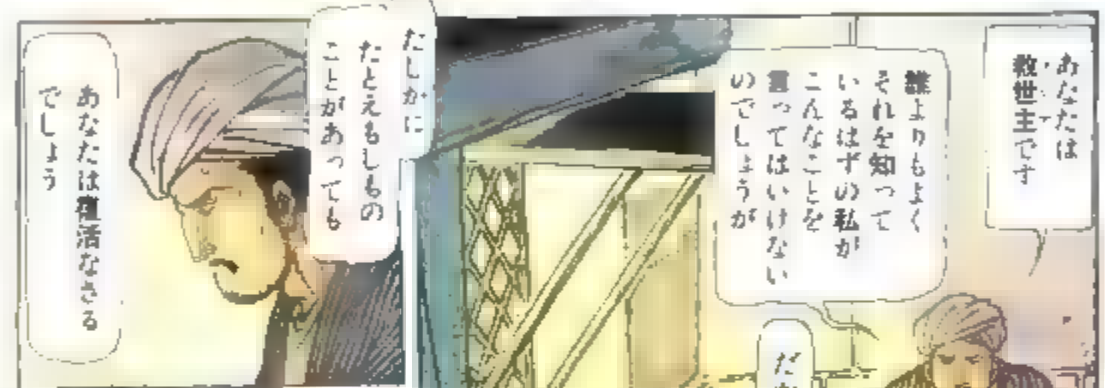
それからオレ達はエフライムという荒野の町へ行き
そこで冬を送った。

第6章

過越(すぎこし)の祭

あの過越(すぎこし)の祭が
やって来たのだった。

ニサンの月（太陽暦四月）の過越の祭は
ユダヤ人にとって一番大切な祭りだ。

モーゼに導かれてエジプトを出た先祖達の苦労をしのんで
人々は聖なる食事をし、祈り、巡礼者達は
国中からやって来て神殿に詣でる。

熱心党は今度こそ
騒ぎを起こすでしょう

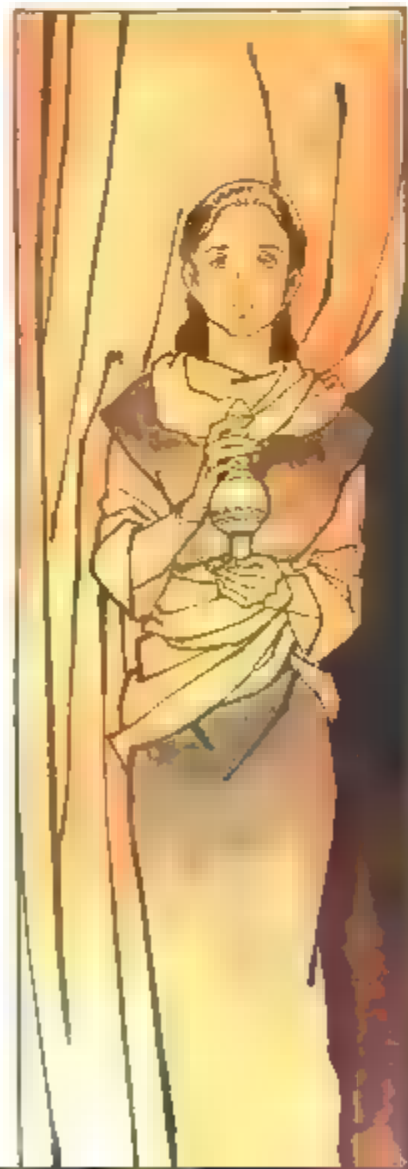
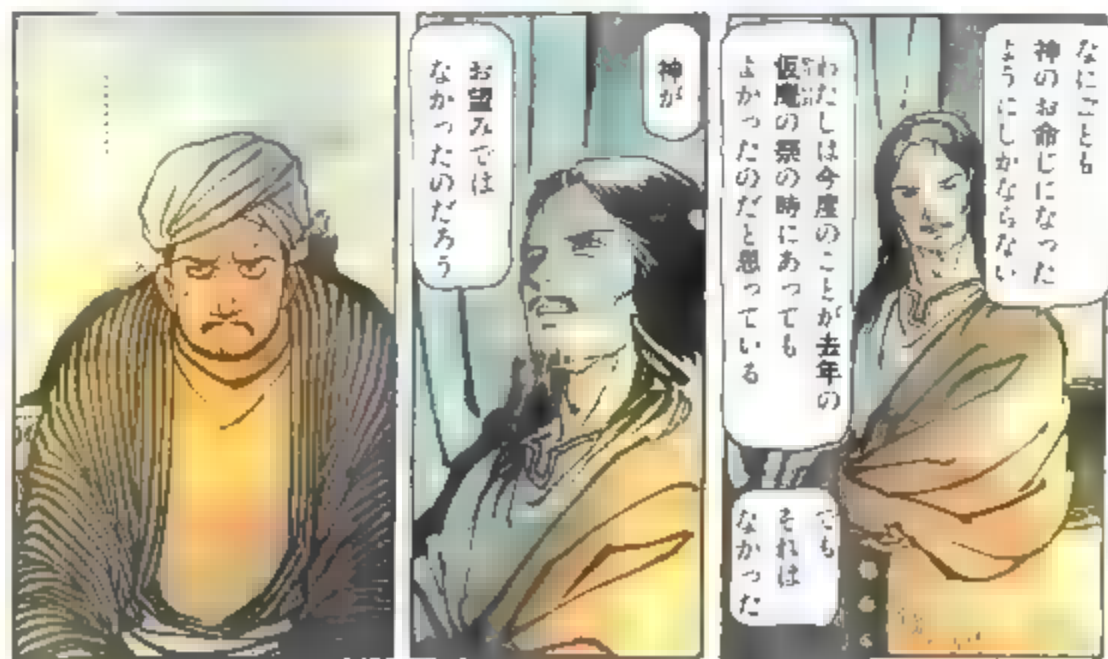
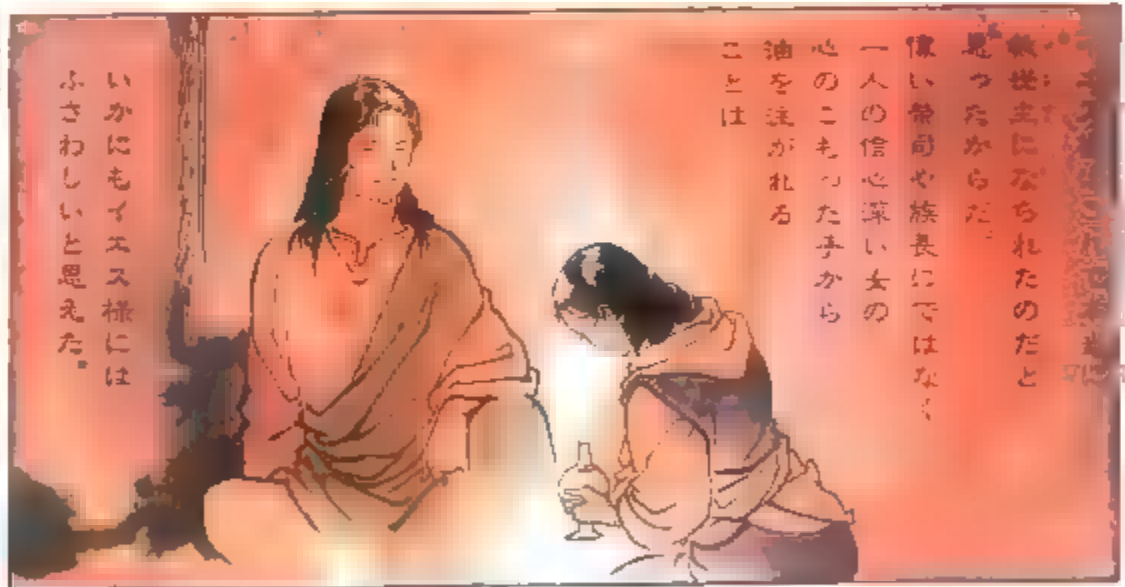
大祭司カヤパも
それを待って
います

騒ぎはローマ兵に
鎮められます！

あなたは
利用される
のです！

たしかに
たとえもしもの
ことがあっても

あなたは復活なさる
でしょう

私のような
つまらない者ですら

生き返る
ことができたの
ですから……

不思議な気持ちでした
あれが「死」だったのでしょうか
わたしはずっと
終わることがないと知っている夢を
見ていたのです

あなたの声で呼び醒されるまで
それが
蘇りなのでしょうか!?
ウザい

なにごとも神のお命じになったようにしかならない
わたしは今度のことが去年の仮庵の祭の時にあってもよかったのだと思っている
でもそれはなかった

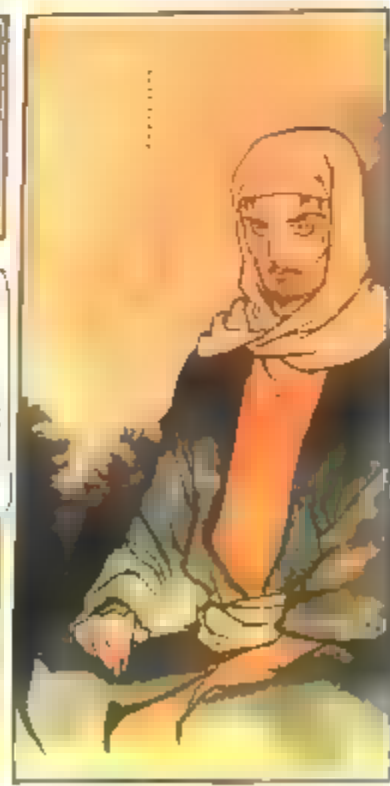
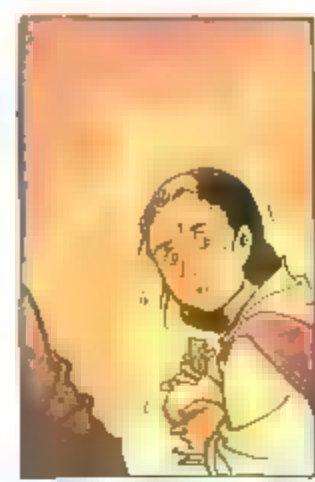
神が
お望みではなかったのだろう
……

※救世主（メシア）とは「油を注がれた者」の意でもある。

・マルコ14 [マタイ26 ヨハネ12]

この女はわたしに
良いことをして
くれたのだ

貧しい人々はいつも
あなたたちといっしょにいる
あなたは望むときに
いつでも貧しい人々に
良いことをすることが
できる

しかし

わたしはいつも
あなたたちといっしょに
いるわけではない

この女はできる
限りのことを
したのだ

埋葬に
そなえて

あらかじめ
わたしの体に
油を注いだのだ

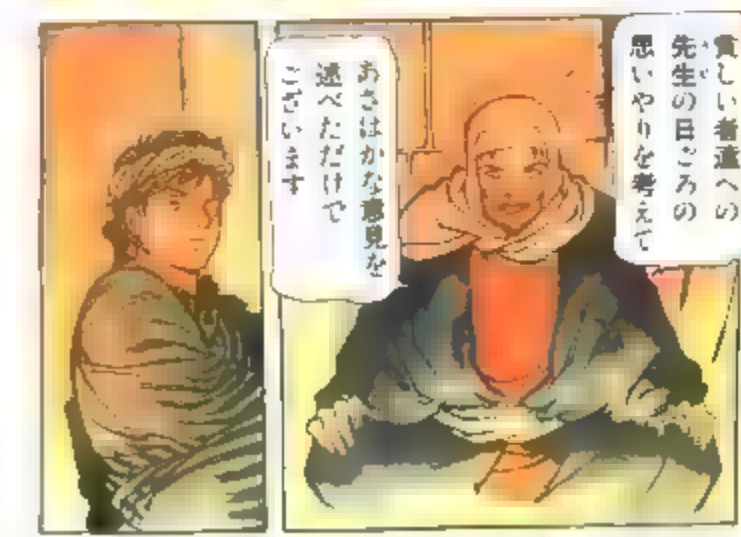
これは失礼を
申しました

それほどの
意味がある
とは知らず
わたしはただ

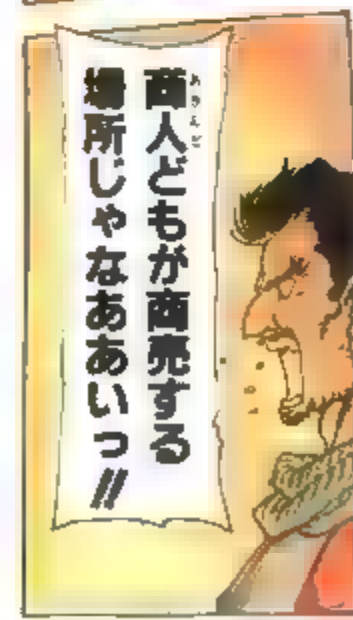
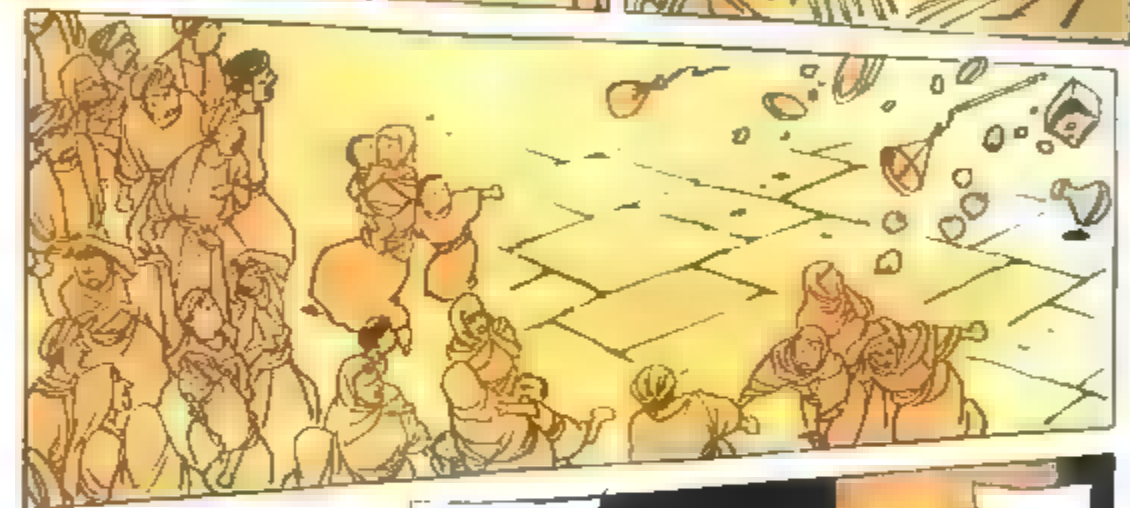
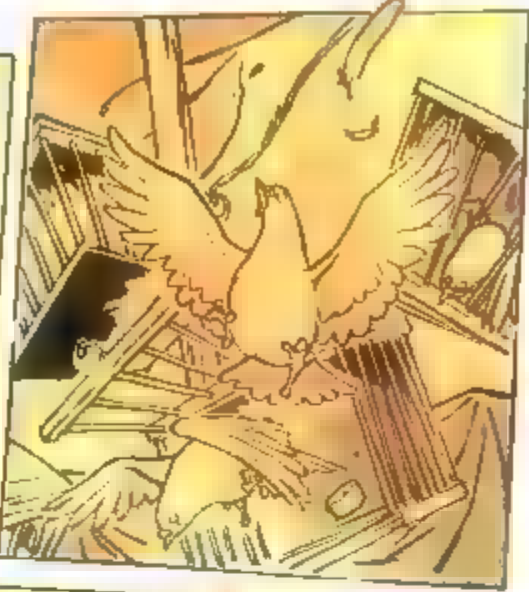
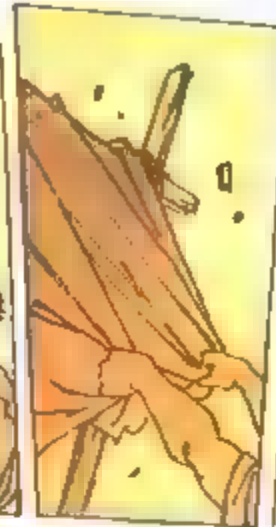
……

貧しい者達への
先生の日ごろの
思いやりを考えて

あさはかな意見を
述べただけで
ございます

ホサナ！！
主の名によって来られる方に祝福があるように！
ダビデの国に祝福があるように
いと高き所にホサナ！！

この日のイエス様のエルサレム入りはまったくそれと同じだった。
——ただ
油を注がれたのがベタニア村で乗っているのが村で見つけたごく普通のろばだったということ以外は…
でもイエス様はやはりイエス様だった。
ソロモンではなかった……

神殿は
祈りの場所だああっ!!
商人どもが商売する場所じゃなあああいっ!!
よけいなお世話だ!!
よくもオレの店を!
賽銭のために両替してどこが悪い
なにを!!
ピンハネしてしこたま儲けていやがるくせに!
このハネあがりのパリサイ派め!
なにを!腐ったサドカイ派の
ドロボー野郎め!!
やりやがったな!
てめーこの!
殺せ殺せ!
こんチクショー!

相変わらずよく騒ぎおるな
ユダヤ人どもは
どうせまた
奴等のわけのわからん宗教の内輪揉めだろう
まったく
付き合いきれぬな

かねてより噂のガリラヤのイエスという者が大勢をひきつれて参っているようです
イエスなる者の素姓はよく知れませんが…
悪しき煽動者という者もあります
熱心党の者共の不穏な動きもあり
見過ごしてはおけません
そう気張るな
ユダヤの地は他所とはちがうのだ
夷を似て夷を治めさせよ…だ
かかわり合わぬのがなによりの得策よ

ナザレのイエス!!

狼藉をはたらいた者たちはおまえの指図だと言っている!
いったいどんな権威があってこのようなことをするのか!
マルコ11 マタイ21 ルカ20

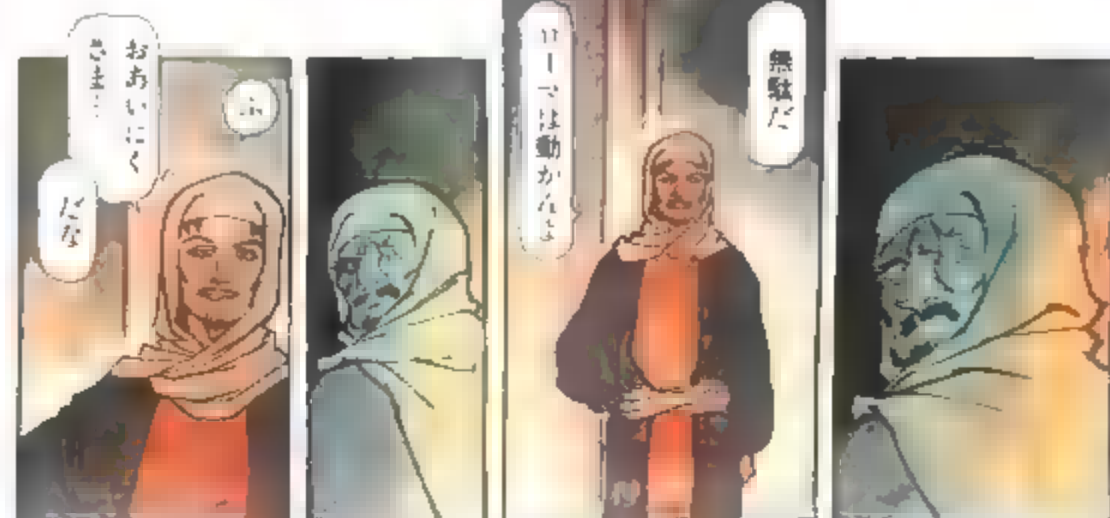
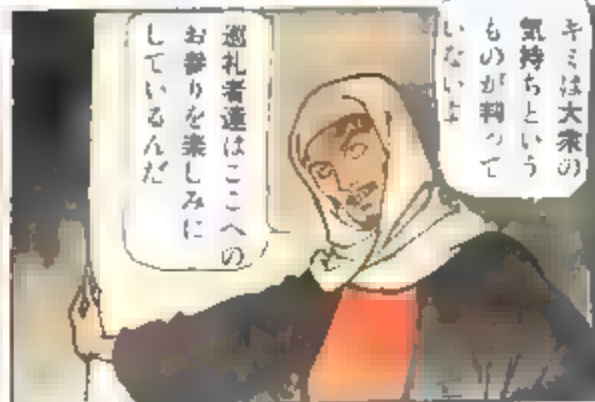
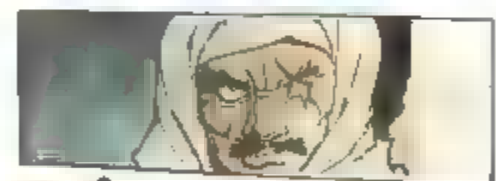
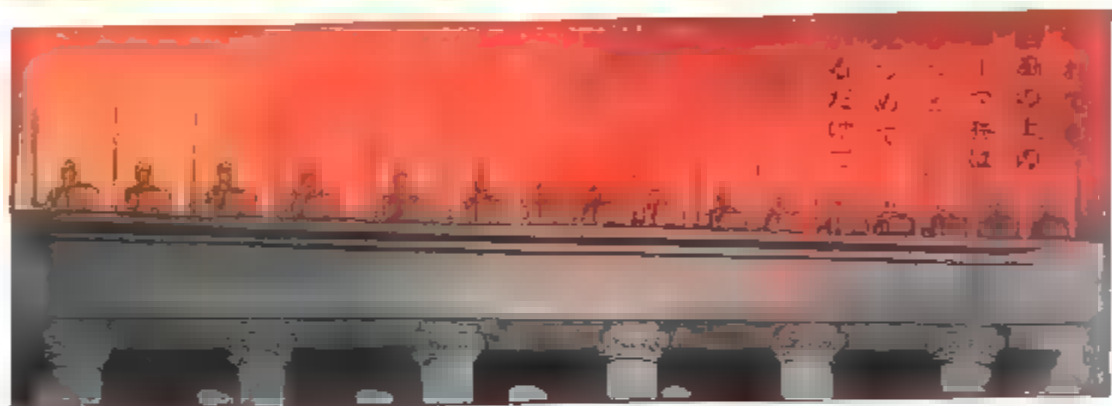
だれがおまえに を与えたのか!?
答えろ!!
ではわたしもあなた方にひとつ尋ねたい
あなた方がそれに答えるなら
わたしも答えよう
ヨハネの洗礼は天からのものか?
それとも
人からのものか?
マルコ11 マタイ21 ルカ20
!!
ふん
それは——
まて! うかつに答えるな!
「天からのもの」と言えば なぜヨハネを信じなかったかと訊き返すぞ
「人からのもの」と言えば…
自分もヨハネと同じだと言うつもりだろう
む…
そ…それには
答えられぬ…

†マルコ12 マタイ22 ルカ20

無駄だ
ローマは動かんよ
ふ
おあいにくさま…
だな
イエスを担いで神殿に入り騒ぎを起こせば
ローマが出る
そうすればユダヤ人は一致結束して反ローマに起つとふんだようだが
あいにく総督ピラトは小心だが利口者だ
面倒なことには手を出さん
それより
これはマズかったな

キミは大衆の気持ちというものが判っていないよ
巡礼者達はここへのお参りを楽しみにしているんだ
商人が屋台で儲けようと
賽銭を誰が懐にいれようと
あこがれの神殿に来て満足さえ得られればあとはどうでもいい
すべてはキミの誤算だ
せっかくのいい駒を
もったいない…
だいたいがあのヘロデの建てた神殿じゃないか
イエスだってそれは承知だ
だからあの人はこんなものはいずれ崩れ去ると言った
神聖な祈りの家だなんて
あの人らしくもない
大衆の半分はもうあの人を離れた
あの人がいいことずくめではないと知ったからな
もうあの人にエルサレムは束ねられない!

この日 神殿の内庭は
一日中騒然としていた。

あちらこちらで
言い争いや
小ぜり合いが
あり

本殿の正門では
イエス様を大祭司に
という一派が何度も
ヘロデの親衛隊と
衝突をくり返した。

日が暮れた

そうくるとも思ったバラバよ
おまえさんは考えが浅いから

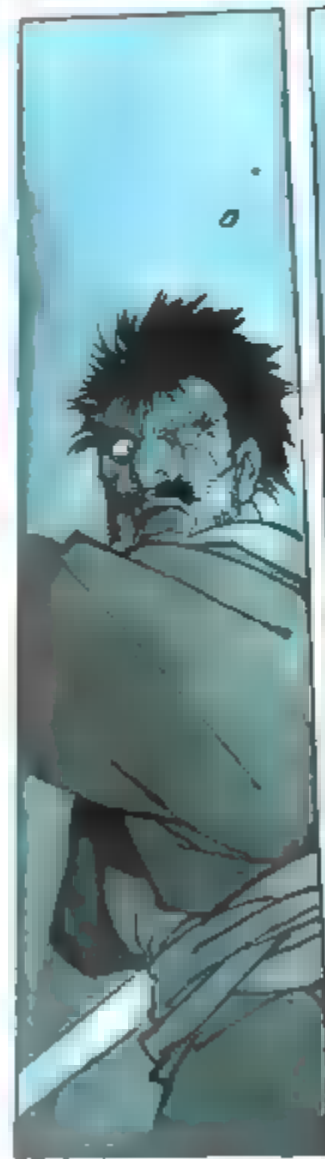
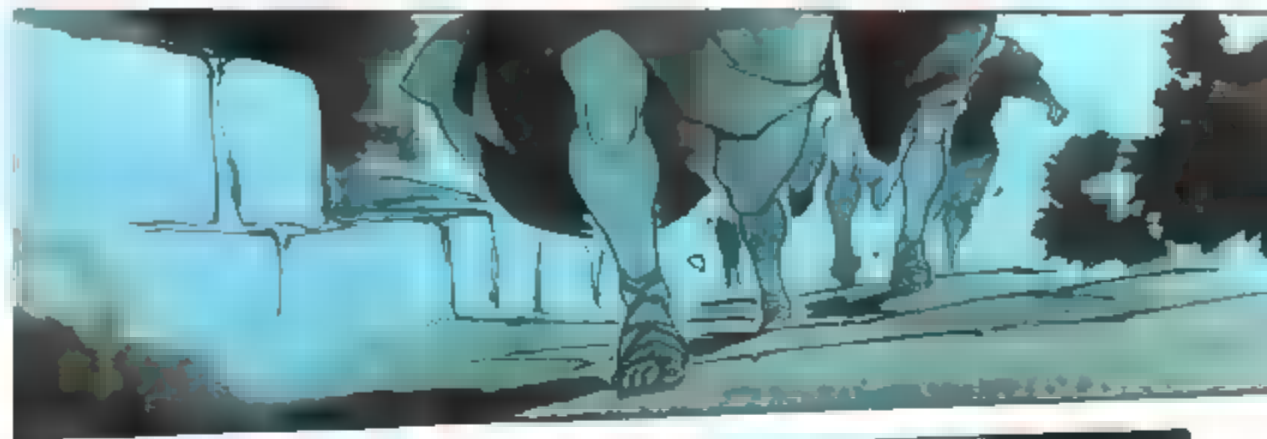
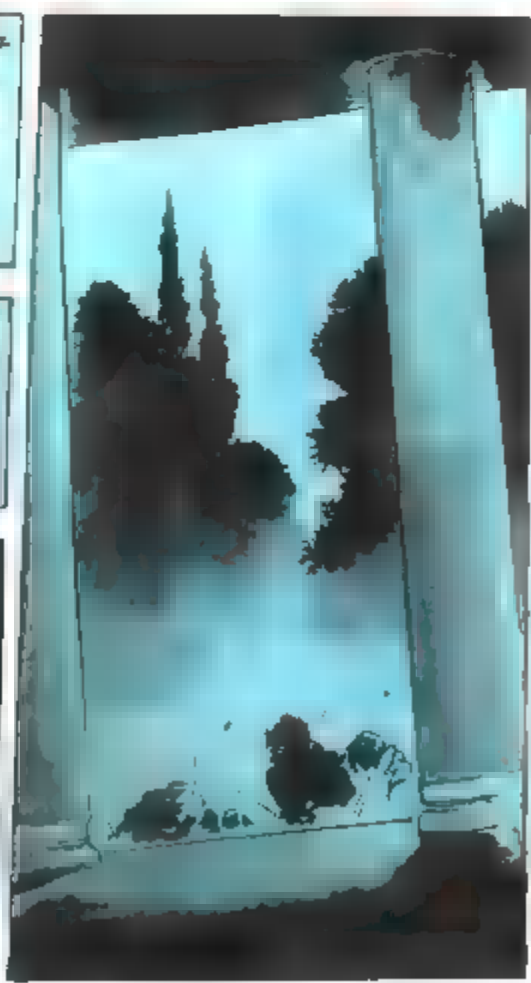
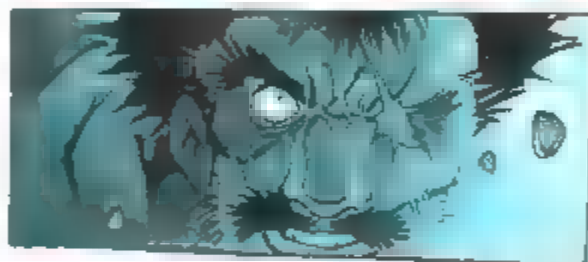
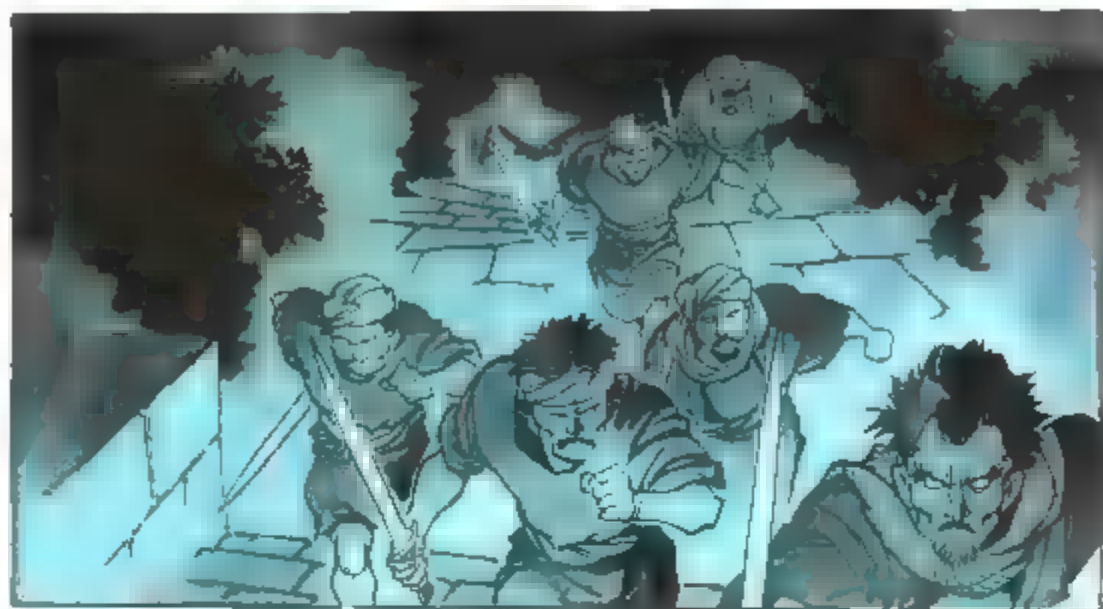
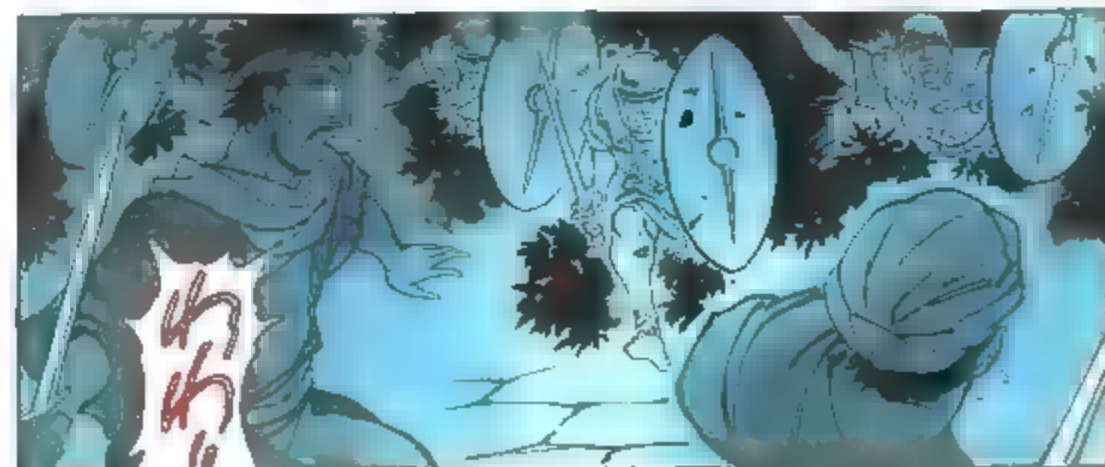
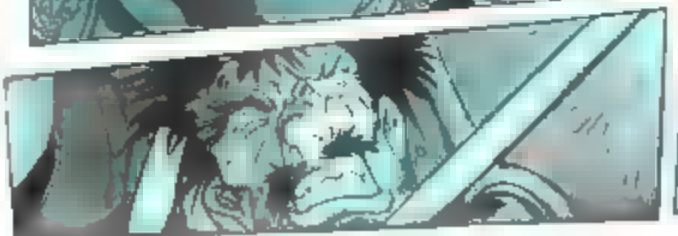
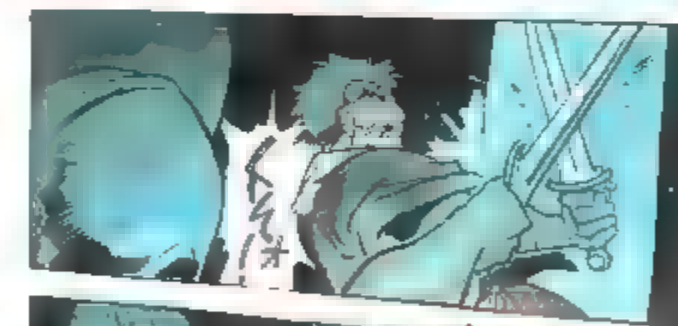
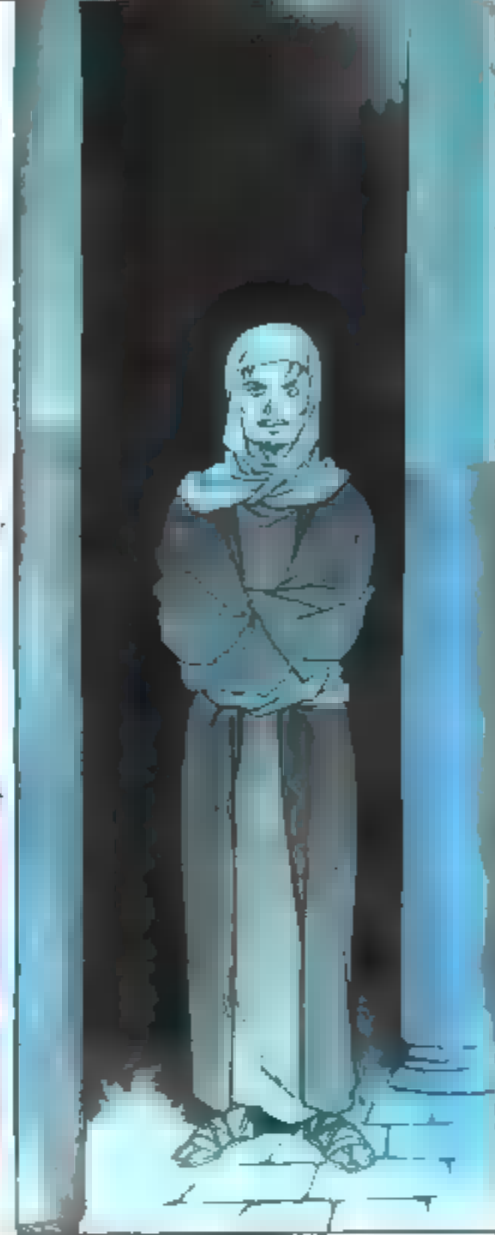
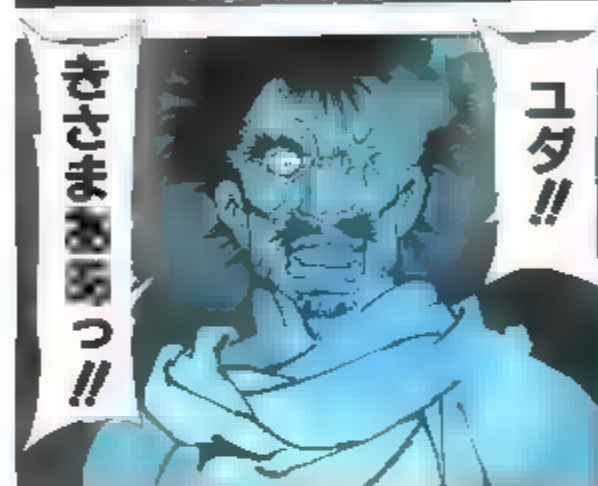
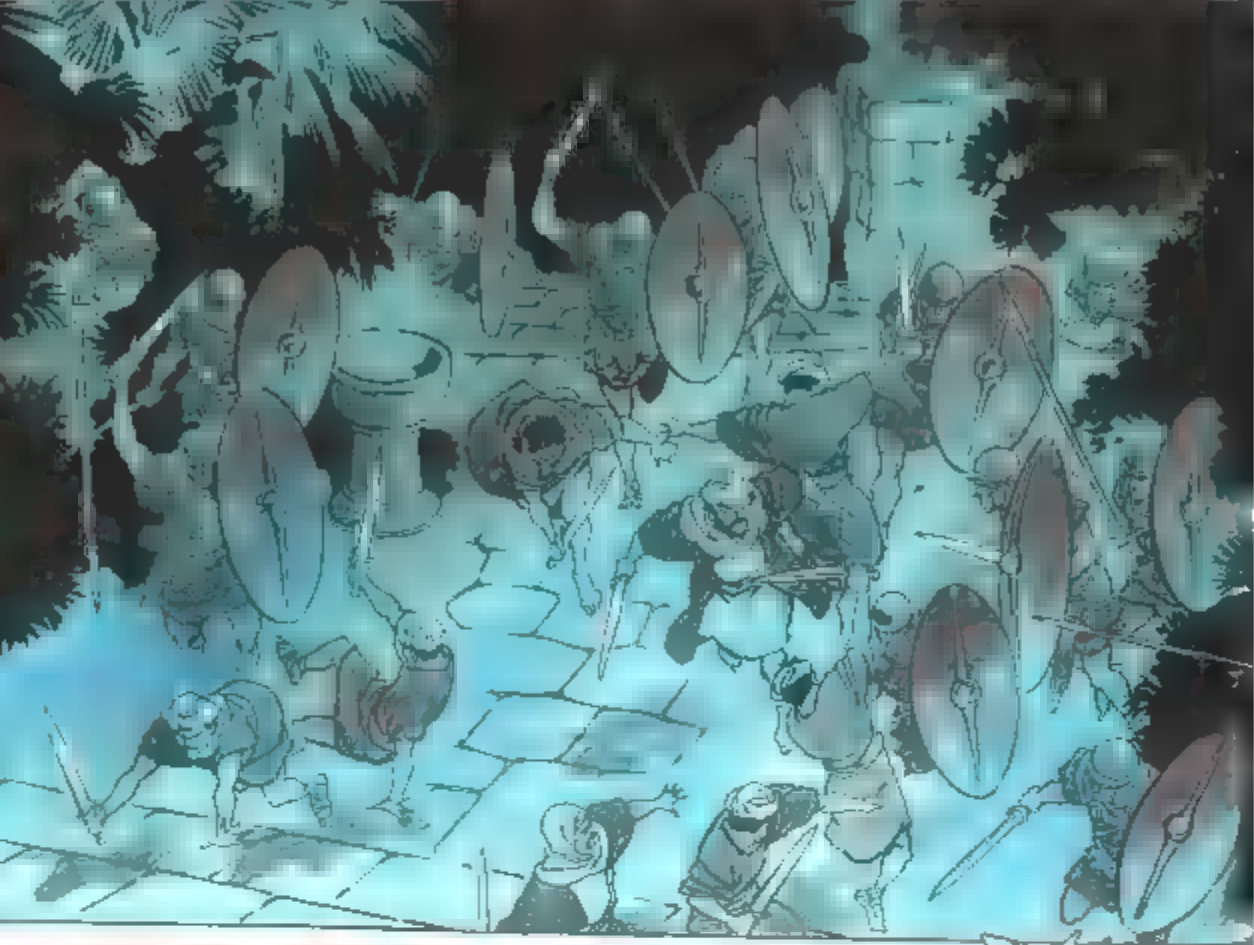
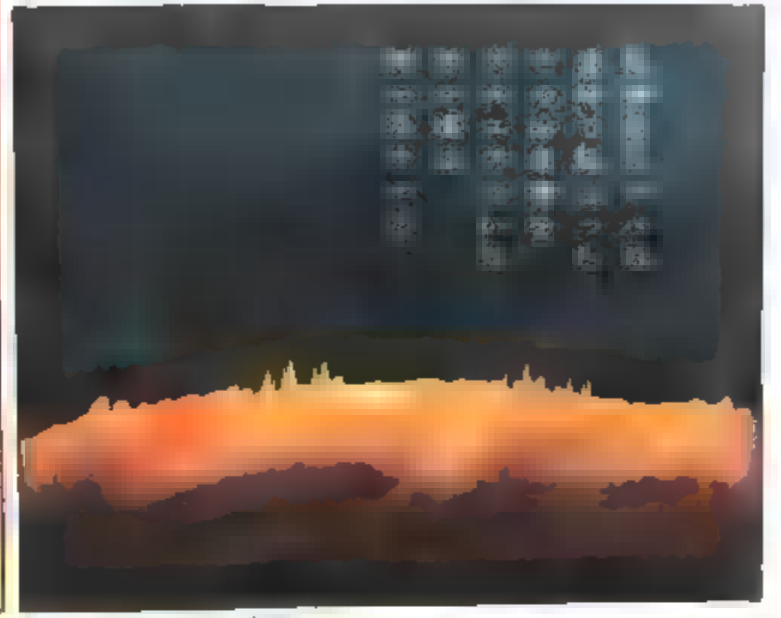
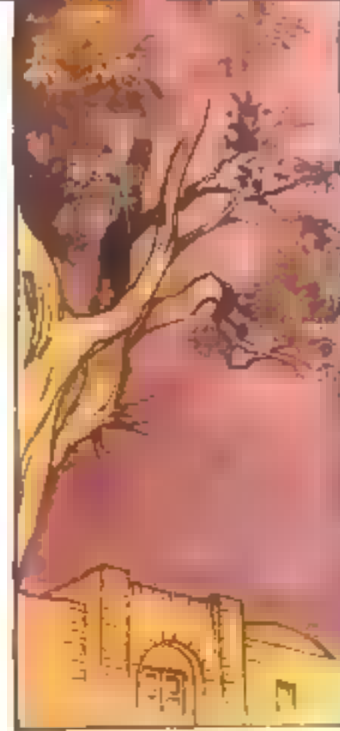
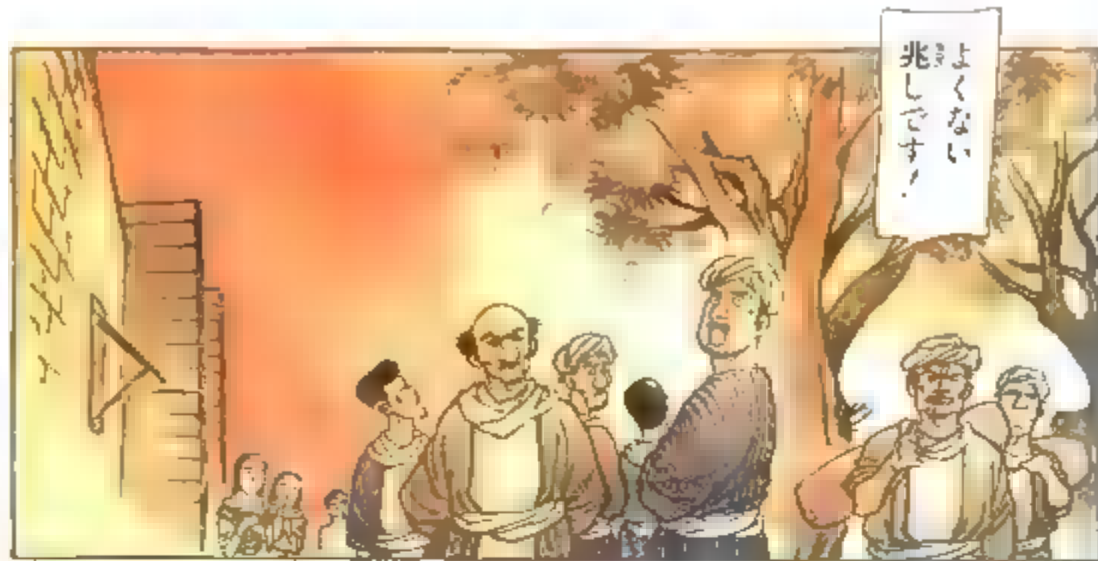
ユダ!!
きさまああっ!!

わあっ!!

わわ!!

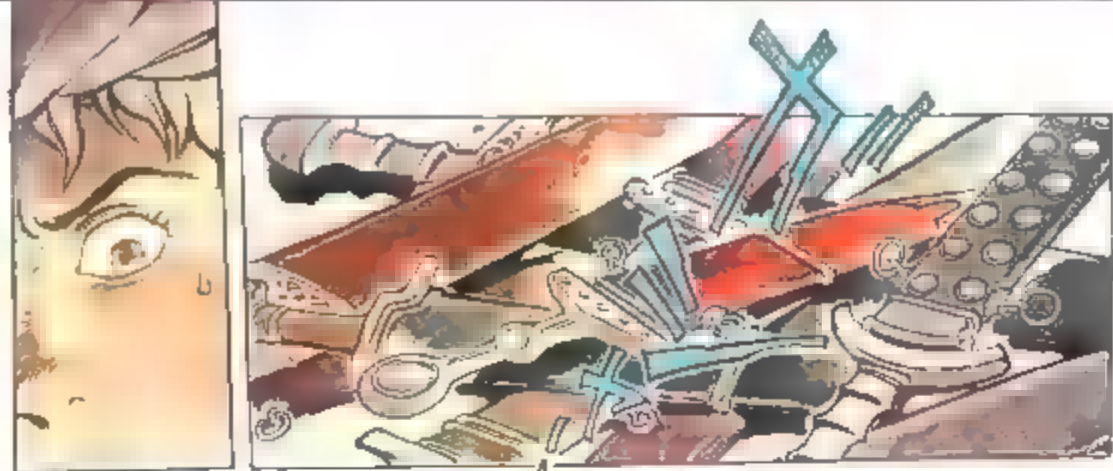
うう!
くそォ!
はめおったなァ

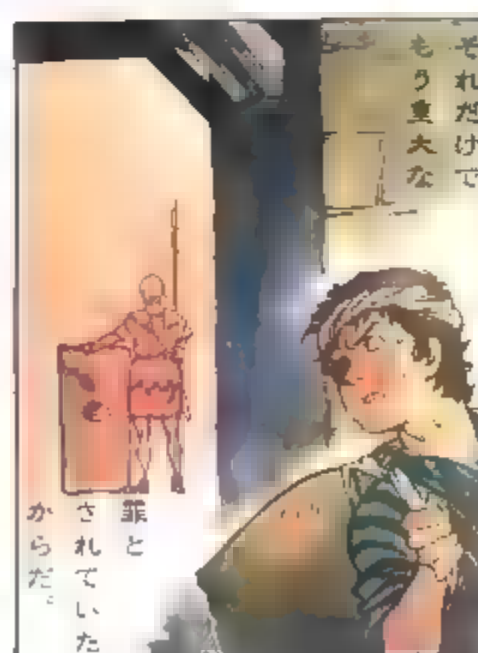
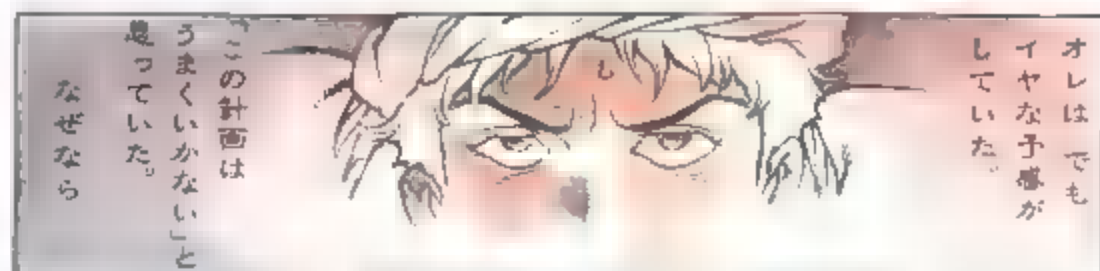
おやっ
このいちじくの木…
枯れかかっているんじゃないのか？
おかしいな
昨日はまだ元気だったのに…
よくない兆しです！
どうか今日のことは
おとりやめください！
ラザロがなにをやめるように言っているのか
オレにもうすうすは判っていた。
ペトロ達幹部の弟子はこの時過越の祭の第一日に合わせて重大な行動に
ることを決めていたのだ。
イエス様がどこまで乗り気だったかは知らない。
でも覚悟はできておられただろう

第7章

ゲッセマネ

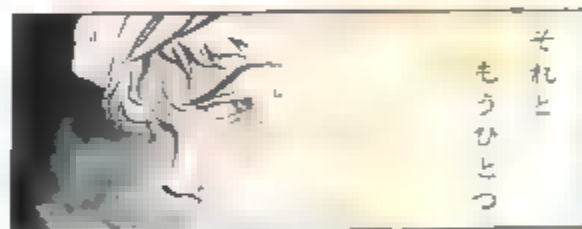
ペトロ達や
熱心党や
神殿に集まる
大勢の人々には
もう逆らえない
というような
気持ちから
ではなく

ただ神の意志に
身を委ねる
という意味での
覚悟が……

そうだ
そこからは
もう誰にも
とめられない
あの出来事が
始まって
いたんだ。
忘れもしないその日
ニサンの月十三日に
ベタニアを出たその時から……

オレと熱心党(ゼロテ)のシモンは
武器を買った。
商人と渡りをつけたのは会計係のユダだった。

その重い荷を背負ってオレは
「いよいよ始まるんだ」と思った。
もう後には引けなかった。
ローマ軍が警戒しているエルサレムではユダヤ人が剣を持つことは

それだけでもう重大な
罪とされていたからだ。

オレは でもイヤな予感がしていた。
「この計画はうまくいかない」と思っていた。
なぜなら

オレたちのやろうとしていることが完全に普通の人達の気持ちから浮きあがっているのがなんとなくわかったからだ。

たった一日で人々の気持ちが引いていってしまっていた。
明らかに……
それがなぜなのか
それは昨日の神殿での騒ぎのせいなのかわからなかったけれど……

それともうひとつ

イスカリオテのユダが
気になった。

いつかバラバが
イエスに言ったように
本当にユダがヘロデの
手先なのかどうかは
ともかく
この
ガリラヤ人ではない
他の弟子達とは違って
都でも顔のきく
小金持ちの男が
心からイエスを信じて
いないということだけは
確かだったからだ。

ラザロの家での
香油の一件で更に
よくわかった。
ユダはイエスに学んでも
学ぼうとさえも
していない
それなのになぜ
この男は
イエスの傍に
いるのか
イエスを売ろうと
しているのか
陥れようとして
いるのか……
イエスはいったい
どう思って
いるのか
気付いて
いるのか
この男が
あやしいと
いうことに
……

その日は
あっと
いう間に
暮れた。

過越の祭の
第一日目の夜は
「セデル」と呼ばれる
神聖な晩餐の
儀式が行われる
夜だ。

そのための部屋を
用意させたのもユダだ。
上市の大きな
家の一室で
大祭司カヤパの官邸にも
そこは近かった。

でもその日
―ニサンの月十三日は
正確には「セデル」の前日
だった……
たしかに
ガリラヤでは
セデルを

それが
その夜だったのは
そうした理由のため
だけだったのかどうか
オレは知らない。

イエスは弟子達の足を洗った
ひとりひとり優しく

慈しむように

と
とんでもない！

もったいない！
恐れ多い！
わ わたしごとき者の足を先生御みずから
そ そ…そのようなこと…

わたしがおまえを洗わなければおまえは
わたしとなんの係わりもなくなる

足だけでなく
手もアタマもお願いします

体を洗った者は足のほか洗う必要がない
全身が清いのだ

そ…そうですか…
それでは…

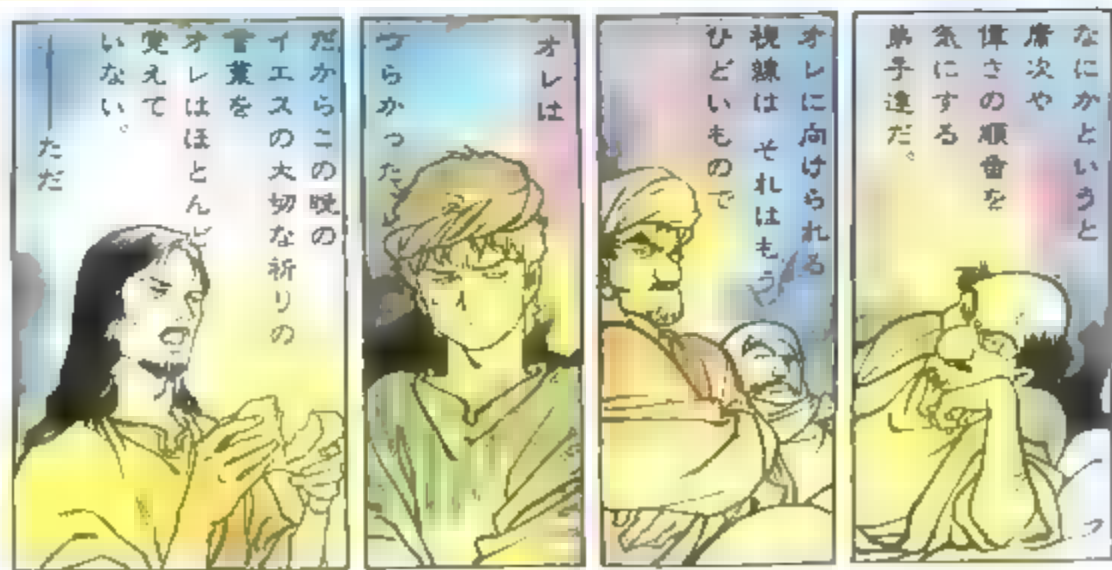
おまえ達は
清い
が……
……

皆が皆
清いわけでは
ない

セデルの聖餐は
その様始まった

オレは
なんと
その時

イエスの右隣に
呼ばれて
座を与え
られた。

気まずい空気だった。

なにかというと
席次や
偉さの順番を
気にする
弟子達だ。

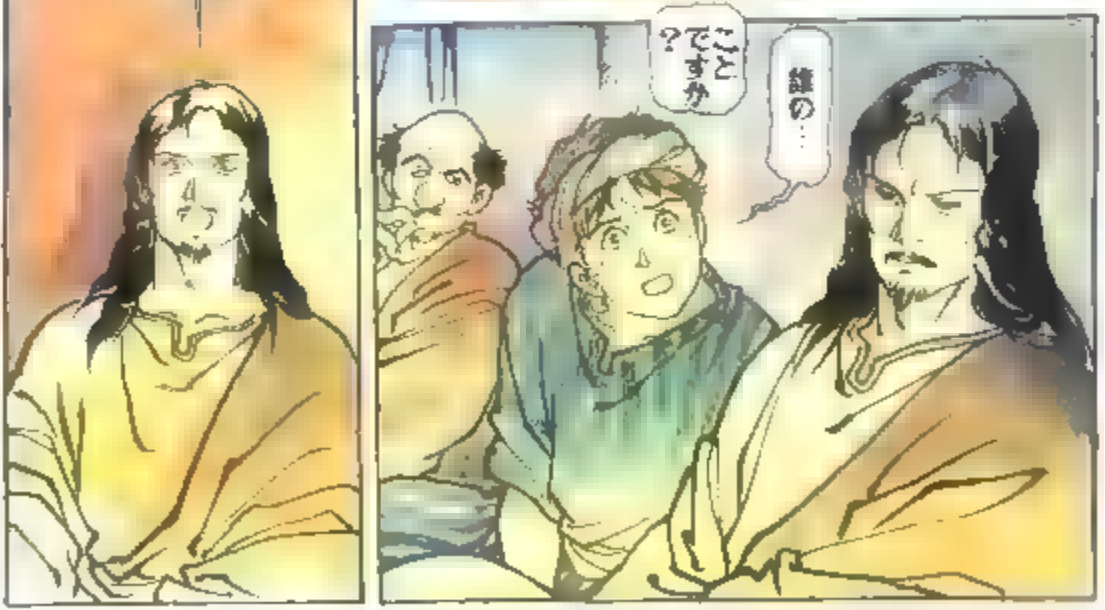
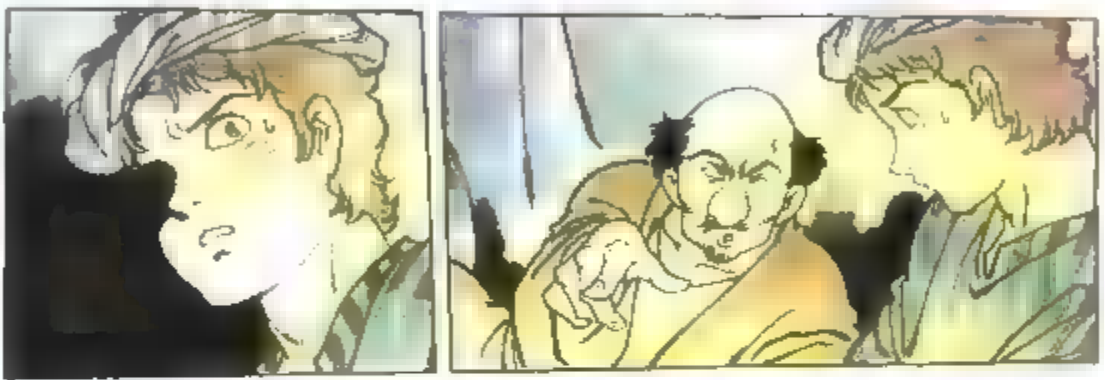
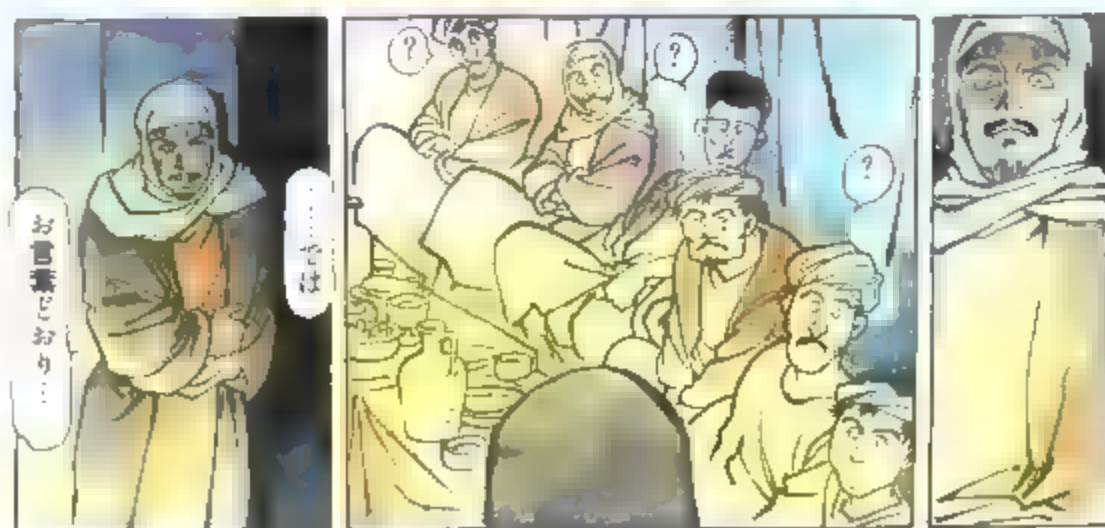
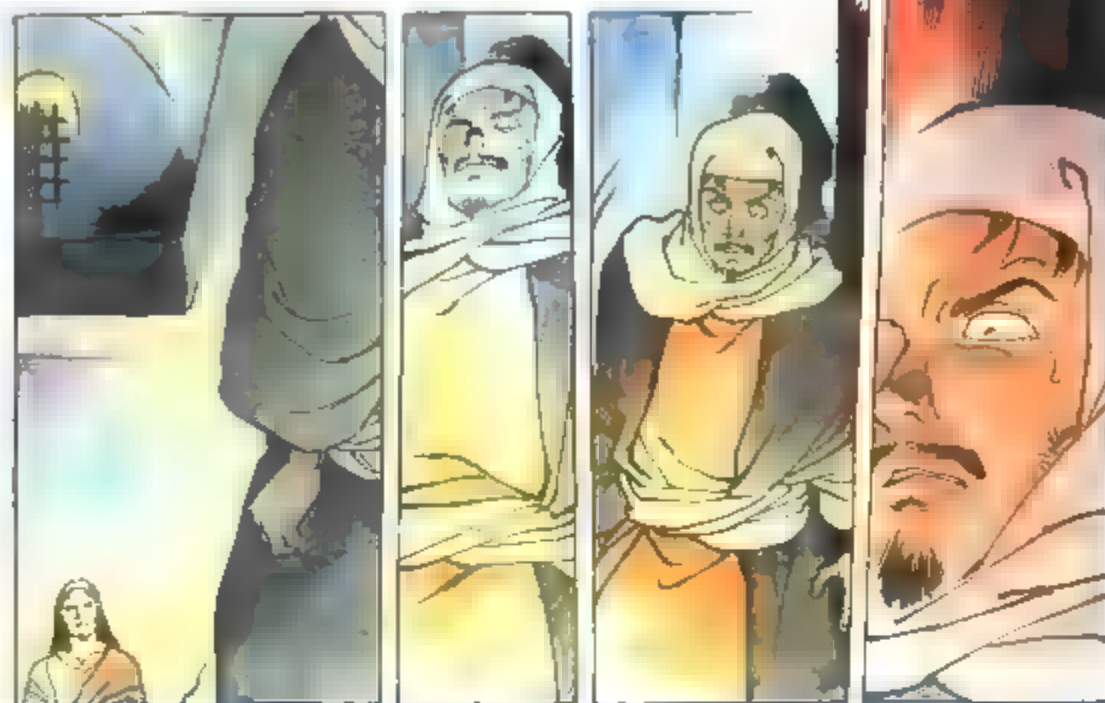
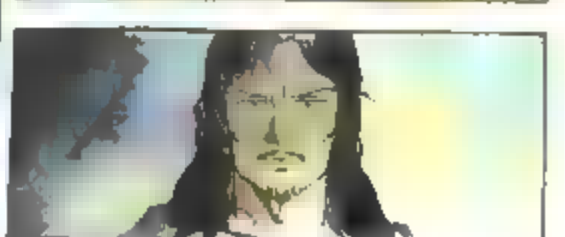
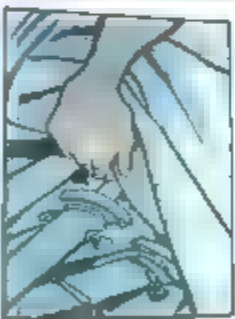
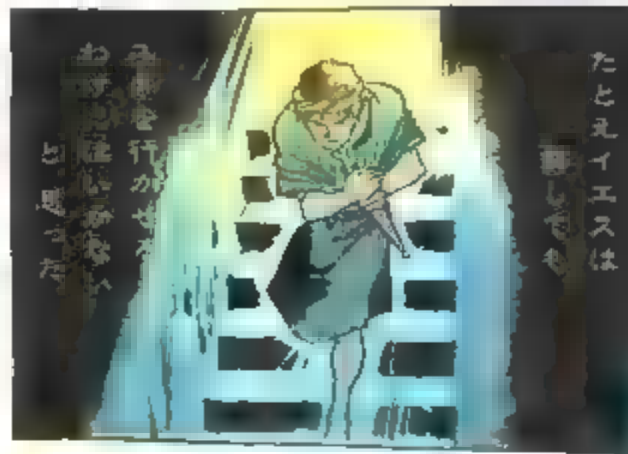
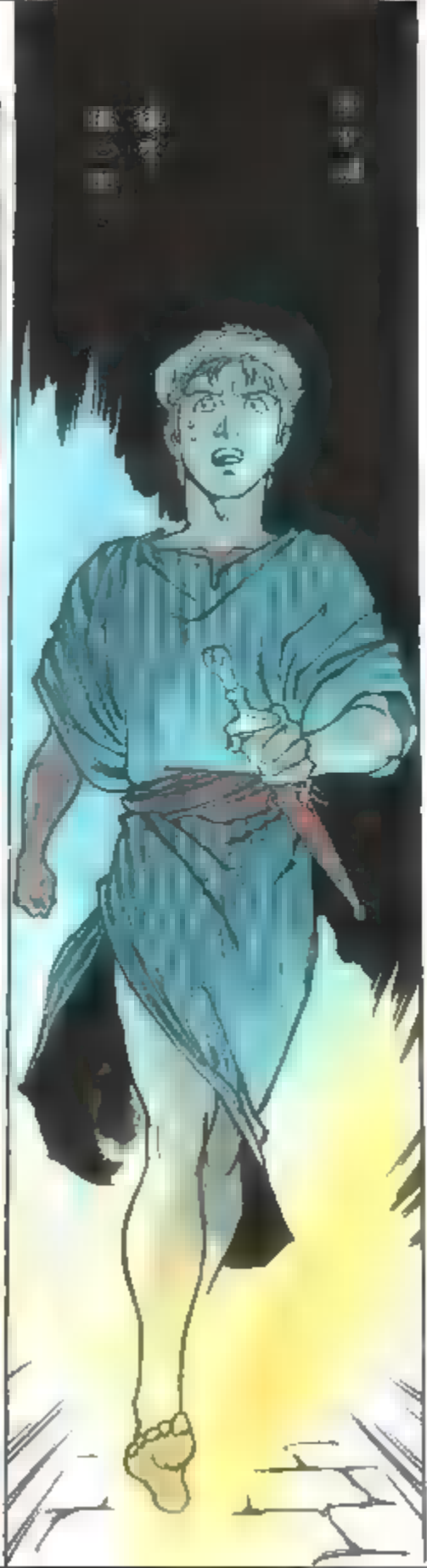
オレに向けられる
視線は それはもう
ひどいもので

オレは
つらかった。

だからこの晩の
イエスの大切な祈りの
言葉を
オレはほとんど
覚えて
いない。
ただ

†ヨハネ13 マタイ26 マルコ14 ルカ22

†この情景はヨハネ13……による。

＊イエス一行が武器を持っていたことはルカ22:38に見える。

たとえイエスは
と思った
行かせたら
なにもかも
おしまいになる！
イエスは
殺される！
オレは
ユダを
殺す
つもりだった。

おまえが
追ってきたのか
ペトロかアンデレが
来るかと思ったが
おまえとはな
イエスにオレを殺せと
言われたか?
先生はそんなことは
言わない
誰も言わない
ほお…
誰に言われなくとも
裏切り者を
オレは
許さない
人聞きの悪い
ことを言うな
誰が裏切り
者だと?
オレはイエスを
裏切ってなど
いない ただ
見限っただけだ
もうすこし
利口な男かと
思ってここまで
ついて来たが
あれではいかん
弟子も
愚か者
ばかりだ
あんな奴等に
いったい
何ができる
そのくせ
何かというと
救世主
救世主だ!
聞いてあき
れるわ!
でも!
あの人は
救世主だ!
ちがう
おまえ達が
でっちあげた
だけだ

イエスがいつ自分は救世主だと言った!? 言ってはいないはずだ!
思い上った馬鹿者なら自分は救世主だというだろう
また 本当の救世主なら やはり救世主だと言って人の前に立つはずだ
だが イエスはどちらでもない

ただの並よりもよく物事の見えるお人だ
そのままで あってくれれば
オレはついていっただろう

救世主が来るとか 神の裁きがあるとかいうのは 愚か者達を戒める方便だ
ところが
より愚かな者達はその方便に溺れる!
現実の世の中を見ずに律法や預言で目を覆い尽くす!
かくて愚か者は災いを招く蒙昧の徒となり果てるわけだ!

神が正しい者や弱い者を見捨て
救われないというのか!

神はおまえが思うよりもっと高い所におられる!
神は ひとつひとつの善悪を裁いたり人助けなどをしたりはしない!

そんなことは人間がやることだ!
どだい何が善で何が悪だ!?
人にはみな自分の意志がある
その意志で善であれ悪であれ選び取ればいいのだ!

おまえは
サドカイ派だな!
何派でもけっこう
オレはそんな区分けに興味はない

まて!

はあ
サドカイ派の言うことはゴマかしだ!
うまいことを言って強い者や金持ちだけに得をさせる!
ローマとも戦わない!
それにおまえはイエスを罠にはめて
殺そうとしているじゃないか!!

それはつまらん言いがかりだぞ小僧
あの人が死ぬようにしむけているのは運命だ
おまえ達が信じようとしている神の導きだよ
あの人はそれを知っているから逃れようとしない
それに
たとえ殺されてもそれがなんだ

イエスは三日で復活するそうじゃないか
これは見ものだぞ

だれかあ
熱心党(ゼロテ)だ
短剣党(シイカリ)だ!!
助けてくれ!!

わ
わわ

わ
わあっ!!

あ
あ
あ

あ
あ

はぁ!

すく

搾油場(ゲッセマネ)は
オリーブ山の
西斜面に
あった。

辺り一帯は

「美しの門」が……

さあ
みんな

「時」が近づいて来た
わたしが一緒にいるのはもう少しの間だ……

主よ
どこに行かれるのですか?

何度も言ったはずだ
わたしがいく所におまえ達は来ることができない

新しい掟を
おまえ達に与えよう

互いに愛し合いなさい
わたしがおまえ達を愛したように
おまえ達も互いに愛し合いなさい
そうすれば人は皆
おまえ達がわたしの弟子であることを認めるようになる
？
？
「主よ！」
どこへおいでになるのですか!?
なぜついていけないのですか!?
わたしはあなたのためなら命を捨てます!!

わたしのために命を捨てる？
そう言うのか

よくよく言っておく
今夜鶏が鳴く前に
おまえは三度わたしを知らないと言うだろう

オレは急いだ
ゲッセマネへ!!
聖餐のあと
みんなはゲッセマネに
移り
そこで
バラバ達は
夜明けと
同時に神殿を
制圧し

馬鹿な計画
だった!
成功するはず
なんて
なかった!!

ユダを通じて

ユダと
カヤバの罠から
!!

父よ――……
↑マタイ26
できることなら
この苦い杯を
わたしから
取り除いてください

しかし
わたしの思いのままに
ではなく
御心のままに
なりますように

時が来ました
子があなたに栄光を
帰することができますように
あなたの子に栄光を
お与えください
あなたは
すべての人を治める
権能を
子にお与えに
なったからです
子があなたから与えられた人
すべてに永遠の命を与えるためです

永遠の
命とは……
↑ヨハネ17
唯一の真の
神である
あなたを
知ることです

……

†マタイ26:36〜46 マルコ14 ルカ22

†ヨハネ17

聖なる父よ
わたしに
お与えくださった
あなたの名によって
彼らを
お守りください
ヨシュア
どうしたんだ!?
ヨシュア〜

なんだよびしょ濡れじゃないか
すぐ脱いで
これで!
なんだあきさま!
この大事な時に勝手に!
ユダがあっ!?
あうっ!!
ローマの兵隊をつれて
来やがるだとお!!

わあ
わ
わ
わあ
わあ
ユダ!
きさまあ!!
ぐ

†ヨハネ18・

う

う…

う…

ナザレの
イエスだ!!

●ペトロの抜剣――ヨハネ18（マタイ・マルコ・ルカは「弟子の一人」と記す）

↑「裸で逃げた若者」の記述はマルコ14:51〜52

第8章

復活

オレは

オレは
ずっと後で
知った

よくわかっているよ
おまえ達はだまされていたんだ
カヤパ様によくお願いしてやる
悪いようにはしないサ
悪い夢を見ていたんだ…
あの人といれば何でもできそうに思えて…
どうかしていたよ…
わかればいいんだ
本当にこの後は
連中をつれてガリラヤへ帰るんだな?

ねえ
あんた

どこかで見たカオだわねええ

あんたもあの人の弟子じゃないでしょうね

ち
ちがいますっ!!

あの人…なんて知らない
わしはちがう
弟子なんかじゃない

大祭司カヤパ様と
アンナス様の前だぞ!!

口のききかたに気をつけろ!!

ガリラヤの田舎者どもをたぶらかして騒ぎを起こそうとしていたな！
どうなんだ！

答えんかあ!!

まて
ひとつだけ問おう
おまえは神の子――か？
そうだ

それでいい
充分だ
今の答えがおまえの罪になるだろう
夜が明けたらわたしはおまえをピラトに引き渡す

さ
む…

う〜〜〜
さむ

こいつどこかで見たカオだぞ

あいつの弟子じゃないのか!?

ちーちがう!

ホセムの耳を斬ったヤツに
似ているな

そうだな
そういや…

オレもゲッセマネでこいつを
見たような気がする

ちがう!!
オレはあの人のことなんて知らない!!
オレは…

鶏が鳴く前に
おまえは三度
わたしを知らないと
いうだろう

あ
あ！

あ…
あ、あああ…

あ
おおお

カヤパの奴
朝っぱらからオレを
働かせおって!
あいつらの
つまらん仲間喧嘩
ごときに
なんでこのオレが
ふり回されにゃ
ならんのだ!
いったい
どういう
つもりだ!

ユダヤ人の王
——だと!?

勝手に
名乗らせて
おけば
いいんだ!
奴等の
神を
冒瀆した
だと!?

くだらん!!

とにかくっ!

奴等は
どうかしとる!
クソ野蛮人め!!

ふん

ユダヤ人達よ
聞け！

ローマは
寛大である！

ローマに従う者である限り
異族の習わしを罪に問うことはしない！
この男を
見ろ！

←この一連のやりとりはヨハネ伝による

皇帝のほかに王なんかいらない!!
そうだ!!
おまえ達が良き属州の民であることはわかった
訴えのとおりこの者の罪を認めよう

ここからは皇帝の慈悲だ!
いいか

おまえたちの大祭　の　では特別に
ローマにとっての罪人を一人釈放してやるという習わしがあるな

どん!!

どっちを釈放してほしいか!?
人殺しのバラバか?それとも
ユダヤ人の王か!?

バラバを!!

ニセ救世主なんか要らない!!
バラバだあ!!
やれやれ…
これで
決まったな
……
悪く思うな
おまえの同胞がそう言っているんだ

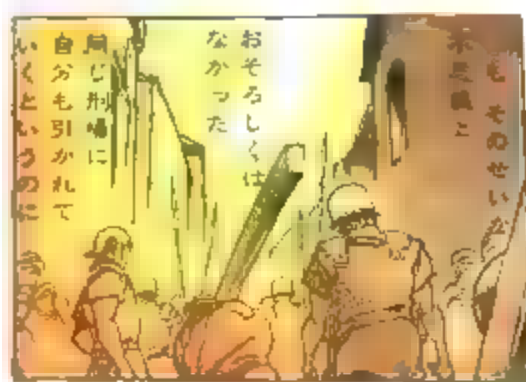
もしもおまえがウソつきでなかったら私は
神の子を十字架にかけた男として歴史に残ってしまうわけだな

イエス
こうして
あなたは
あの道を
歩くことに
なったんだ。

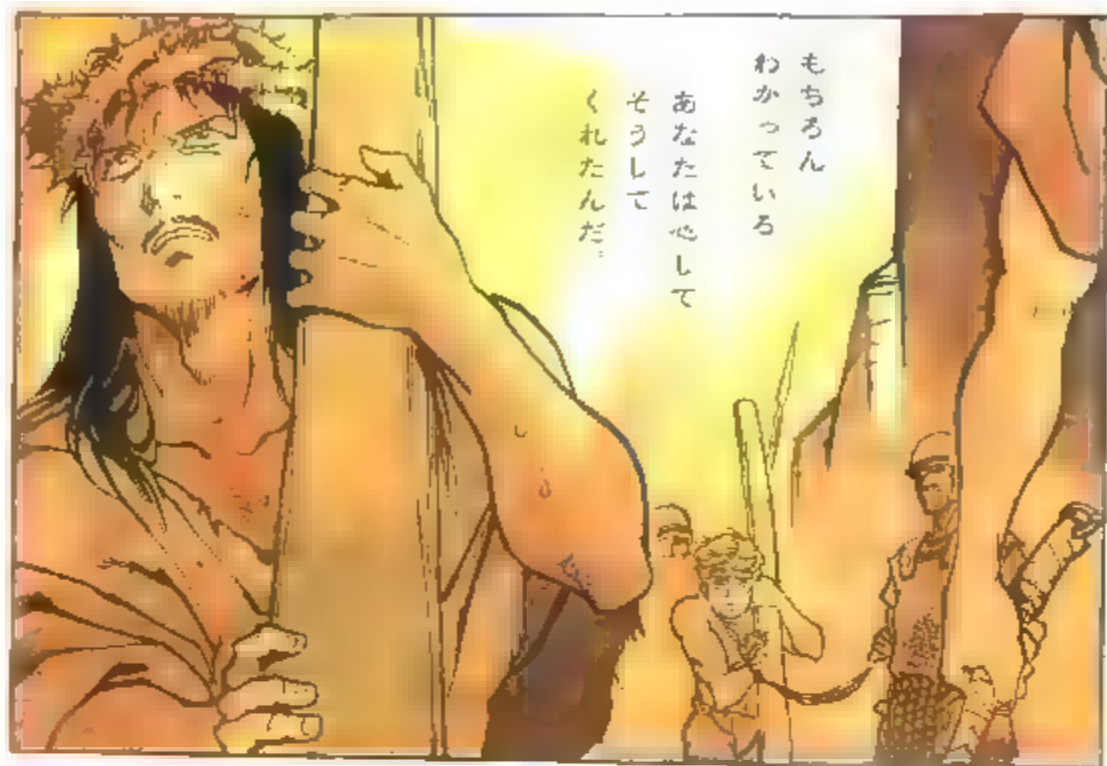
オレ達
よりも
何倍も
重い
十字架の
横木を
背負って…

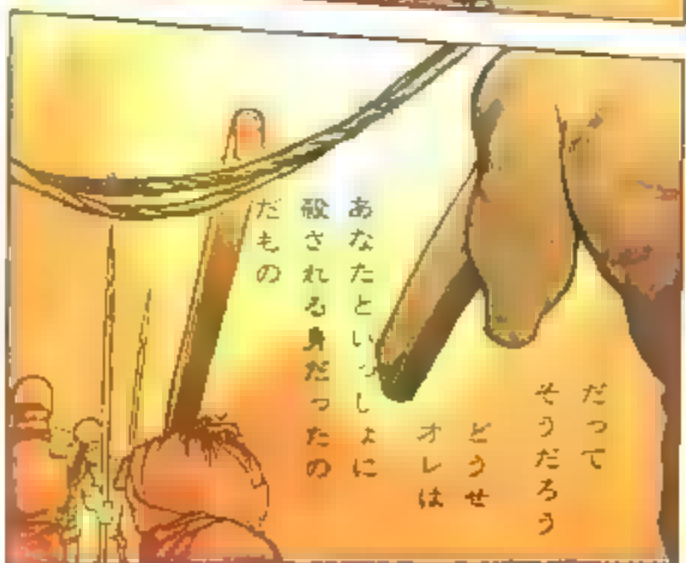
オレは見た
あなたが敷石に
残していった
血と汗の
シミを

そして 鞭の雨の下であなたが
幾度となく
倒れるのを

オレはとても
つらかった
あなたを
見続ける
のが…

もそのせいか
不思議と
おそろしくは
なかった
同じ刑場に
自分も引かれて
いくというのに

ただ
ひとつだけ
悲しいことが
あった。

それは
この間
ずっと
あなたがオレのことを
ちらと見てさえ
くれなかったことだ。

もちろん
わかっている
あなたは心して
そうして
くれたんだ。

オレに声を
かけたり
優しくしたり
すると
余計に
オレがつらい目に
あわされると思って…
でもオレは
あなたの
一言
オレへの
まなざしが
欲しかった…
だって
そうだろう
どうせ
オレは
あなたといっしょに
殺される身だったの
だもの

手足が
十字架に
縛りつけ
られた時
か……

やっと「しゃくり」が始まったな

むこうはもう引きつっています

はっ!
はっ!
はっ…
はぁ
あっ…

なかなかしぶといヤツだった

ぜっ
ぶっ

おかげでもう日が暮れてしまうわ

やれやれ

おい!

脚を折れ
一撃でやれ
無様に騒がせるな
へえ
ああ
もうダメだ…
脚を折られた
もう…
ガリラヤには
帰れない……
サラ
ごめんよ
オレ……
バカだったよ……
あ

はい
百人隊長様

アリマタヤのヨセフ？

日も暮れました
どうか死体を
引きとらせてください

大きな罪で罰せられた者達ですが
明日は安息日でもありますし

死んだ者を安息日まで葬らずにおくことは法律で戒められています
ピラト■もお許しくださいました
どうか

■閣下がお認めになったのなら
それでいい

その預言者は確かに死んでいるな？
はい

念のために槍で突いてみろ

どうだ？
わき腹から水のようなものが
血ではないな

まちがいなく死んでいる
引きとってよいぞ

あとの二人も確かめますか？

もうじき夜だ

安息日が

来てしまうぞ

ローマも
ヘロデも
気がつかねえ
場所だ
ここは？
……
あの人は？
死んだ
三日前に
三日前
三日……
三日！

三日後に
わたしは復活する
あ
あ!?
手も足も悪くすると一生使いものにならねえ…
立つのは無理だよ
あ
あの人は
どこだ!?

死んだんだよ
あいつは
オレは知らん
おまえらを下げ渡してもらったアリマタヤのヨセフが
どこかの空いていた墓に仮に葬ったと聞いているだけだ
なら その
ヨセフの所へ!
こいつを背負っていって
したいようにさせてやれ

園の墓地に
ちょうど
掘ったばかりの
墓がありました
ので…
そこに
葬ったのです

いつまで
そうして
おけるかは
わかりませんが
あんまり
お気の毒な
お最期だった
もので……
幸い
ピラト様も

あの方のことには
あまり係わり
合いたくない
御様子で…
ああ

ここです

入口の石は
男手二人で
転がせます

ふううう…

さあ
どうぞ

イエスはまだ

かえって
なんだか
ほっとして
これで
いいんだと
いうような
気持ちさえ
した……

そんなふうに思えて…

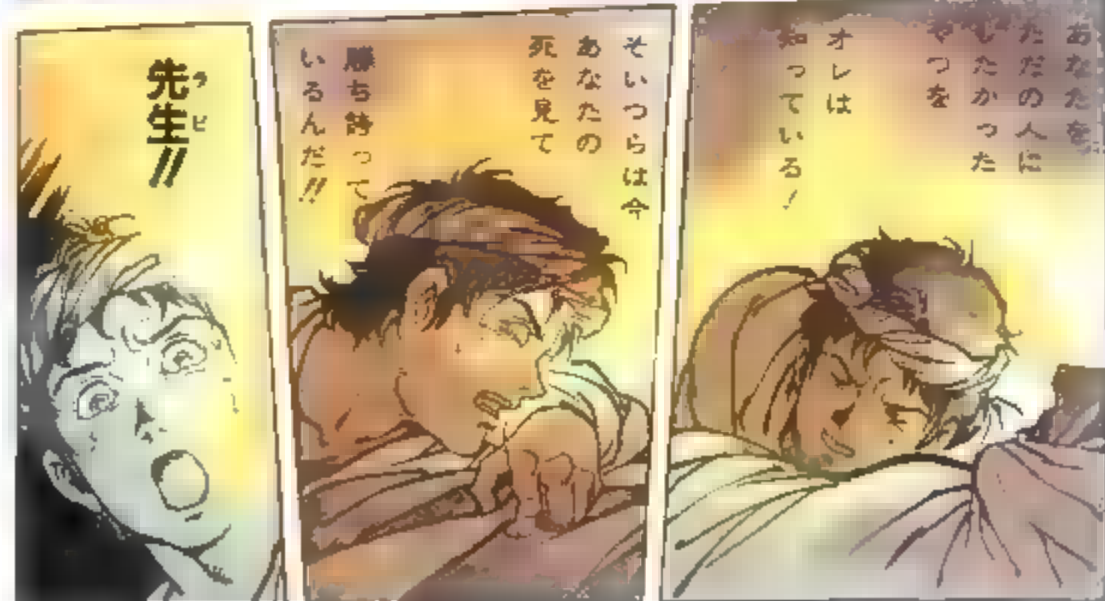
でも

死んだままなんだ

もう三日経って

あなたの苦しみの
万分の一かを
いっしょに味わって
っているオレは
あなたにこのまま
安らかでいて
ほしいと思うけれど

それではあなたは
ありふれたただの
ウソつきになって
しまう
あんなにも
優しく
正しく
苦しみに耐えて
きたあなたが…

ダメだ!
それでは
ダメなんだ!!

あなたを
ただの人に
したかった
やつを
オレは
知っている!

そいつらは今
あなたの
死を見て
勝ち誇って
いるんだ!!
先生(ラビ)!!

おい!
なにを
するんだ!

うるさい!
手伝え!!
こら!!

先生を
復活させるんだ!!

アリマタヤのヨセフ……

オレのやろうとしたことをすぐにわかってくれた人……

オレの命の恩人
そして

町の方から人が！
!!
いそいで！
早く!!
入口は狭いから！
気をつけて！

あんたは

オレを
忘れていくなんて……

でも仕方ないか……

足音だ

そうだ
マグダラのマリアだ

気のせいた歩きかた……
安息日があけるのを待ちかねてイエスに会いに来たんだ。
あとの二人は誰だろう

どうするの

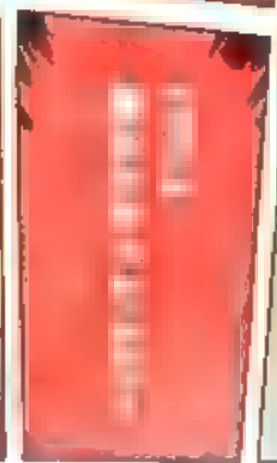
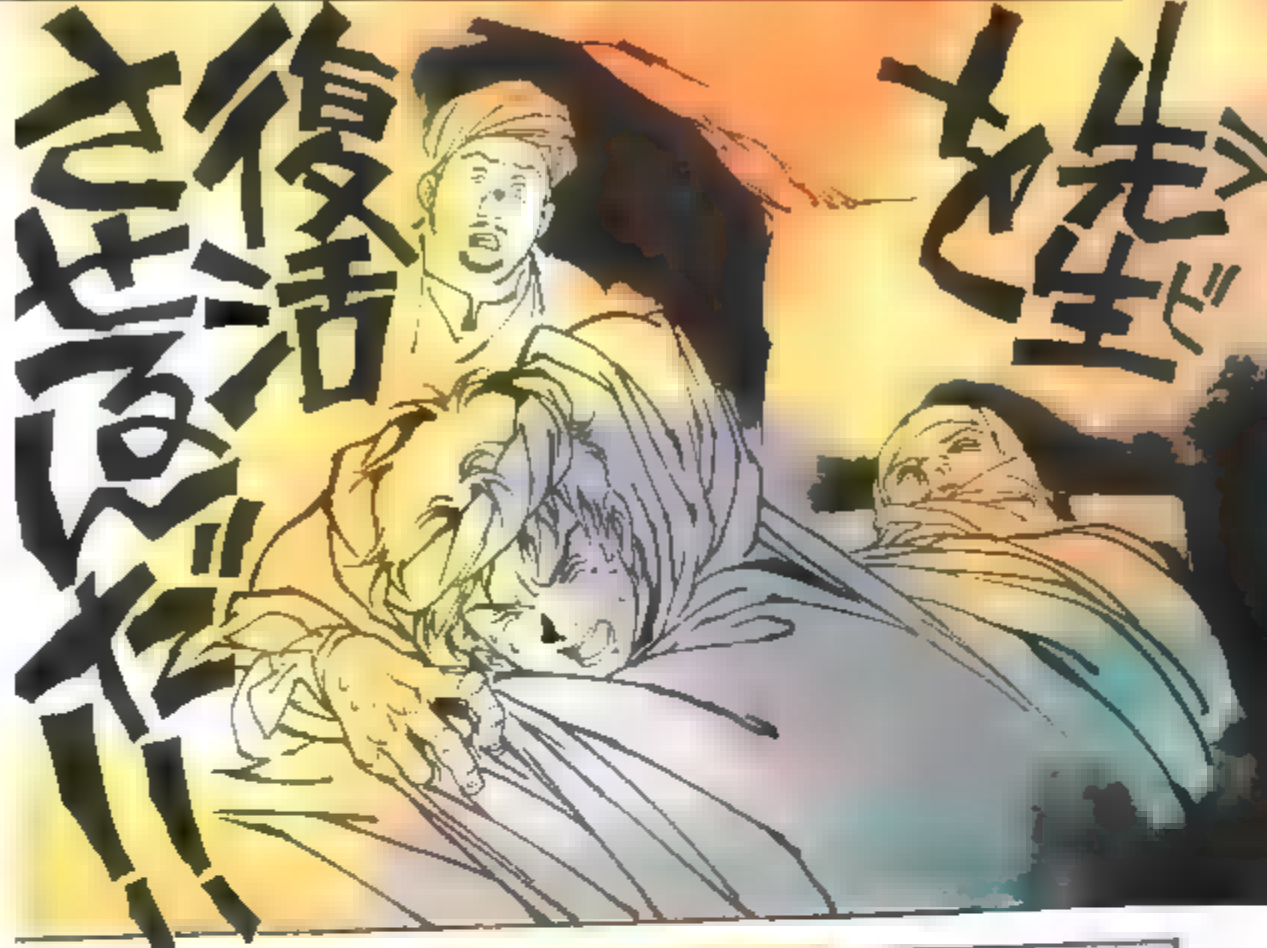
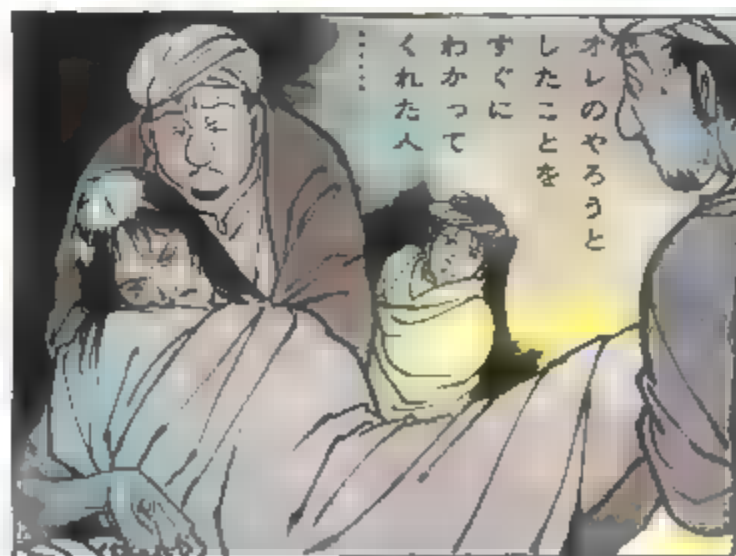
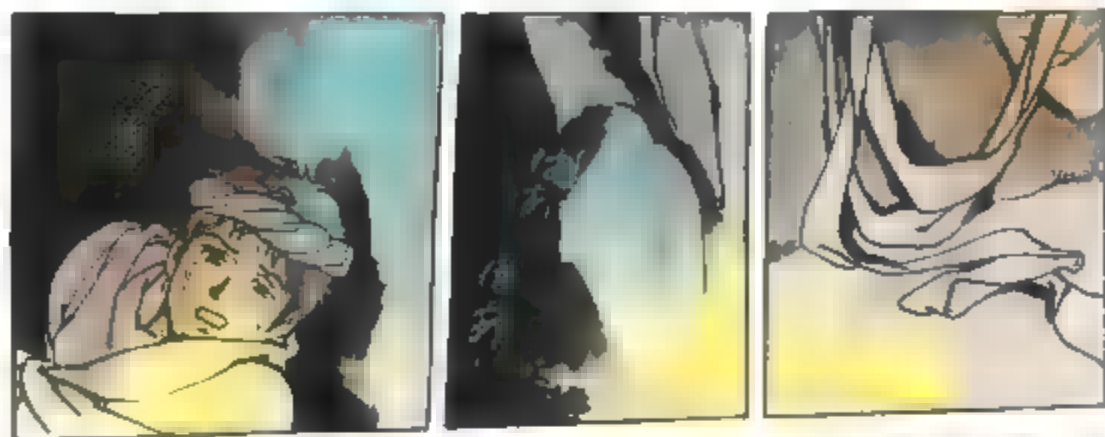
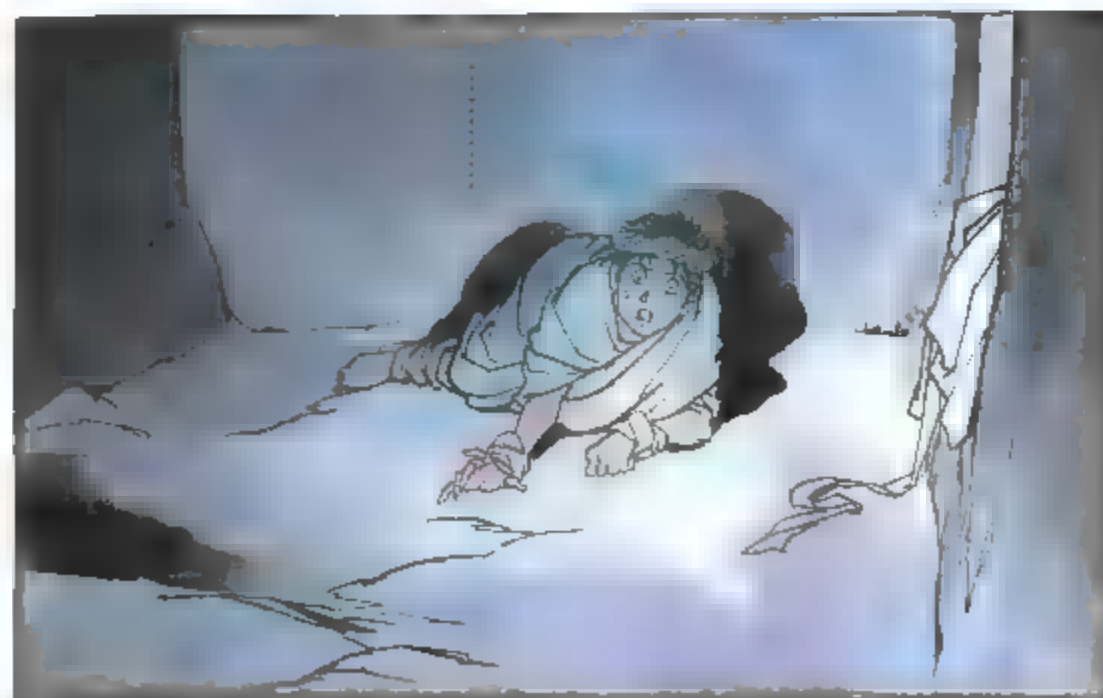
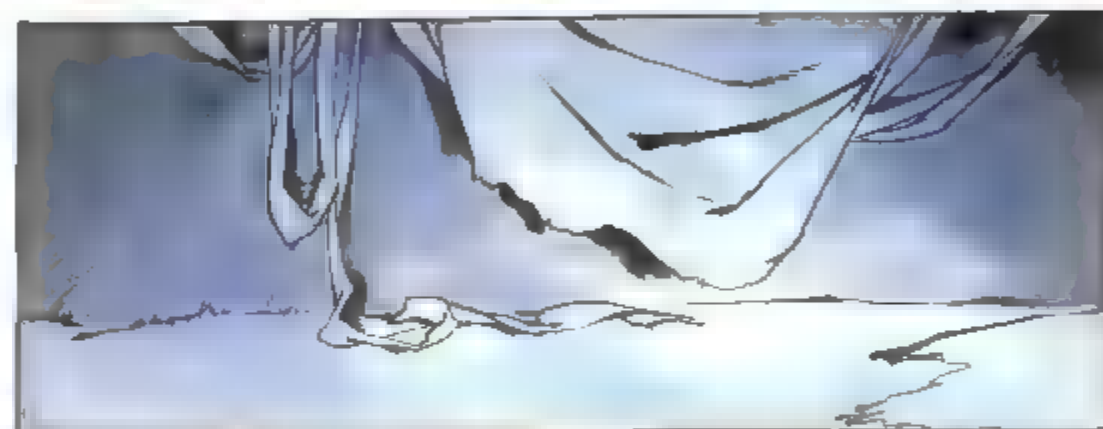
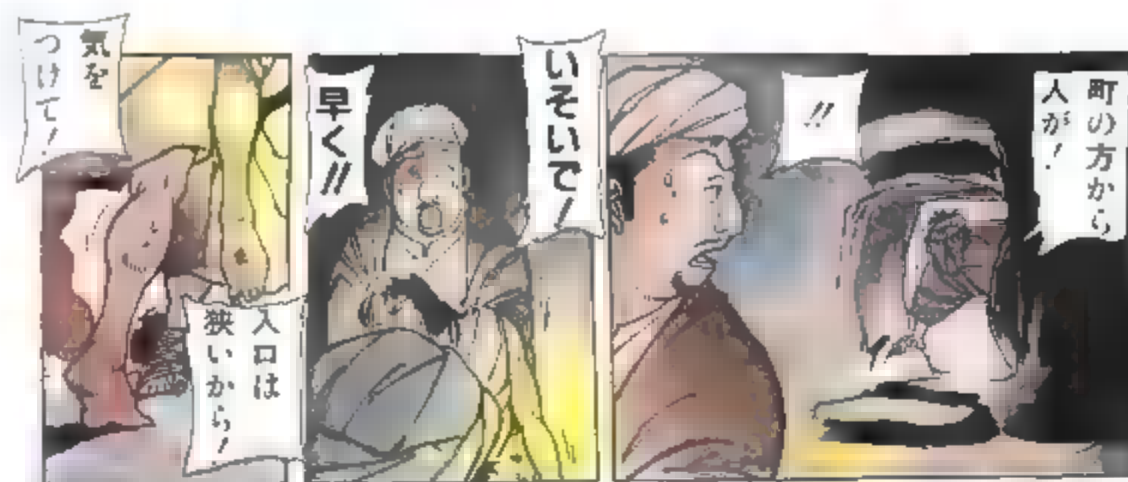
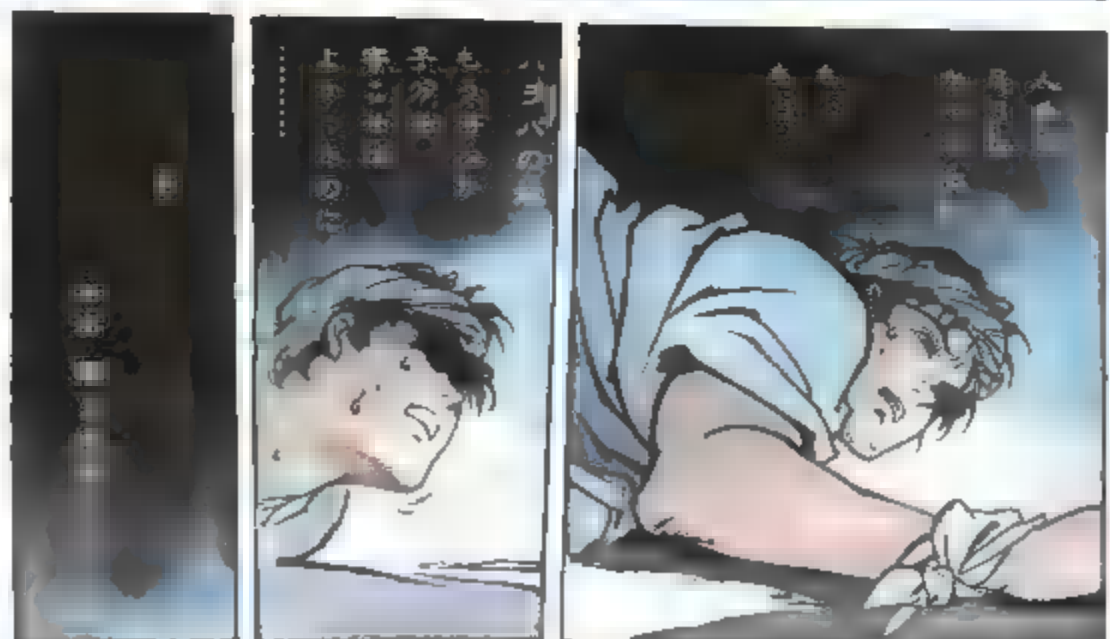
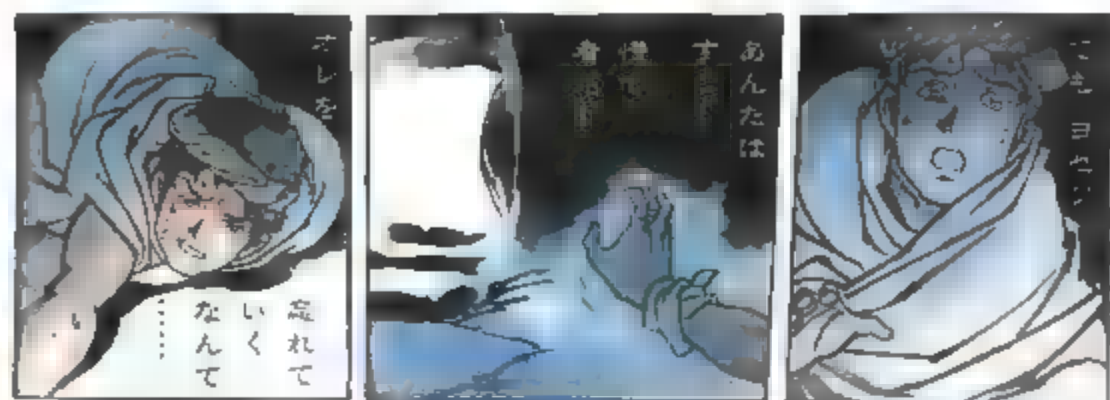
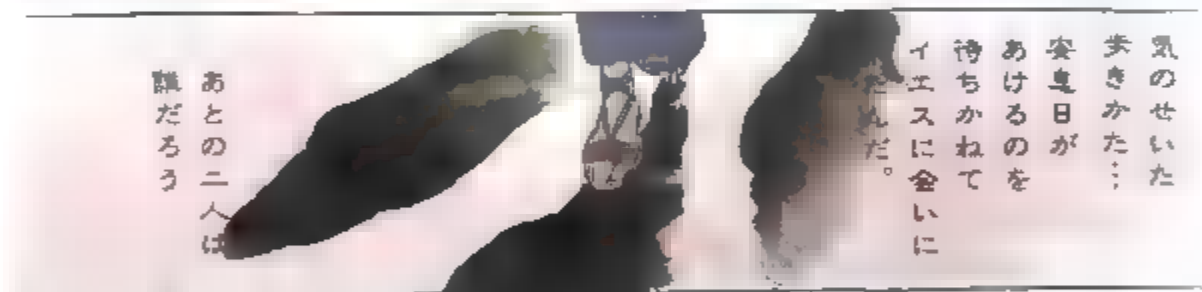
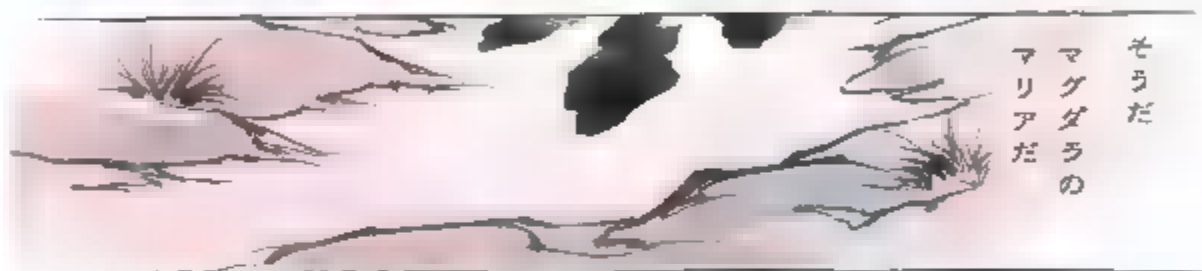
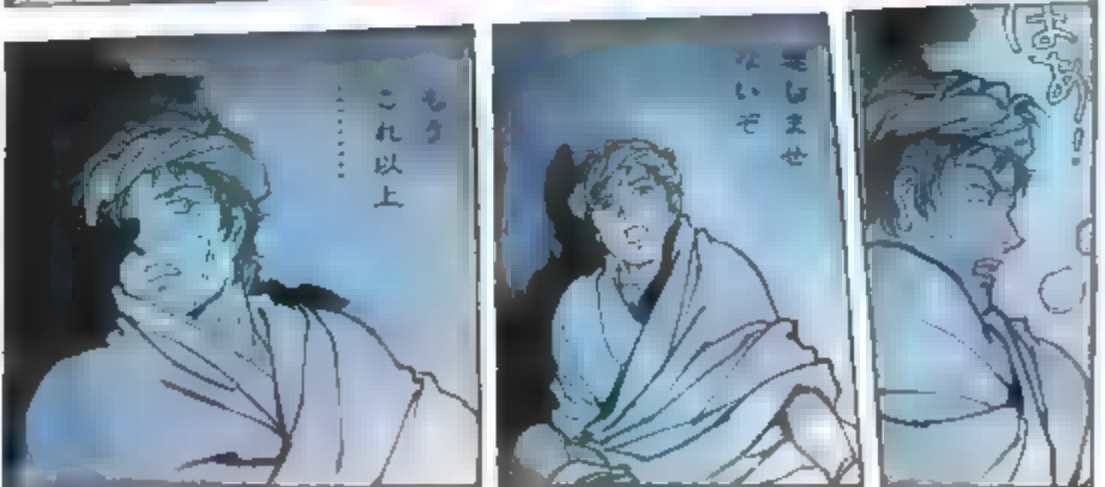
あの人は
もう
ここに
いない

いるのは置いてきぼりの

悲しませるわけにはいかない！

はあ！

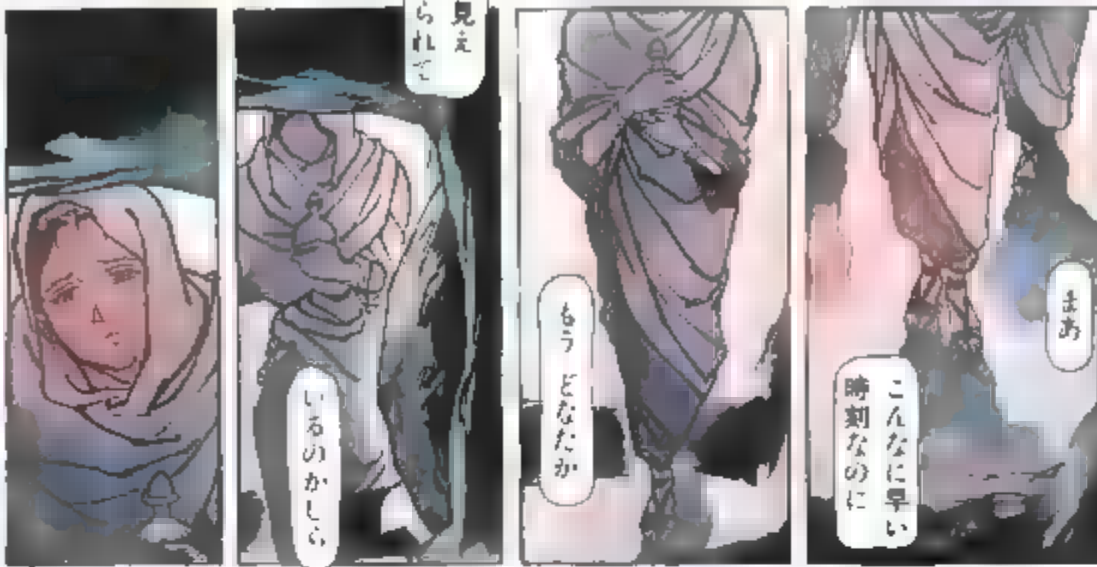
はあ！
悲しませないぞ

もうこれ以上……

たぶんまだ誰も
来てはいないでしょうね

お墓の入口の石はとても重いのですよ
誰かが転がしてくれるといいのだけれど…

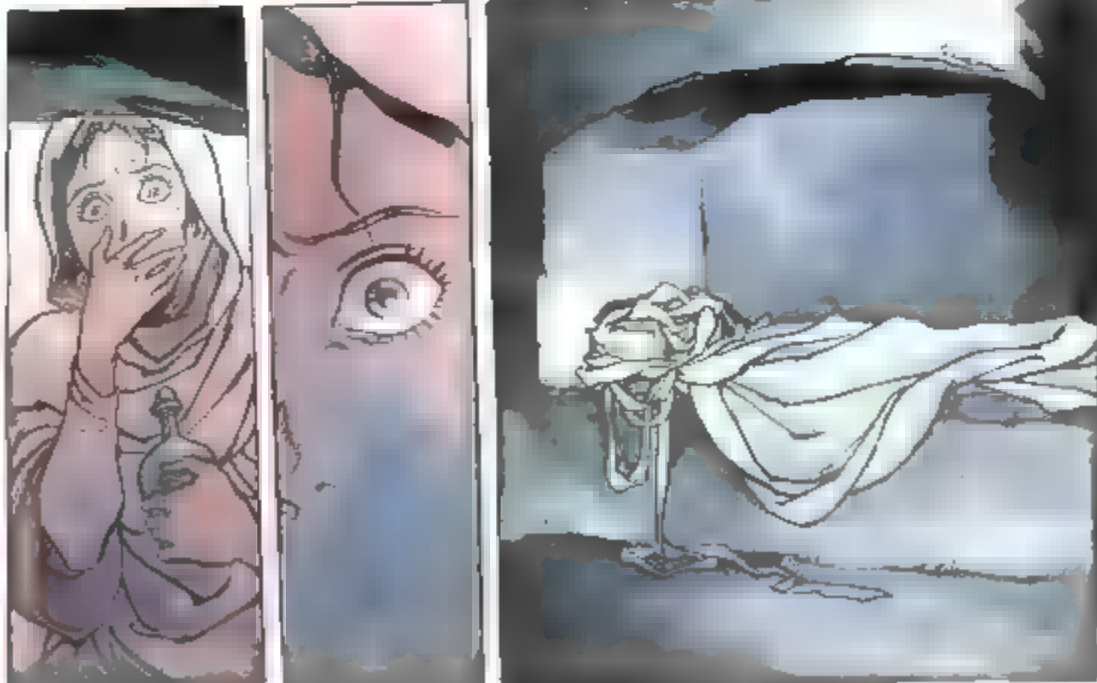
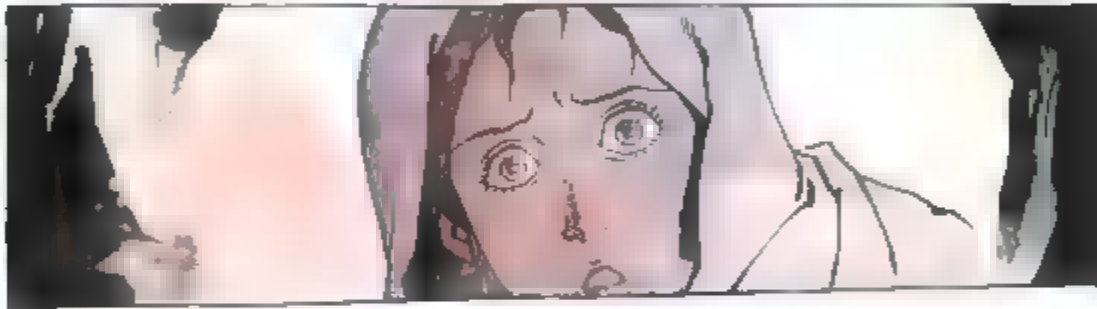
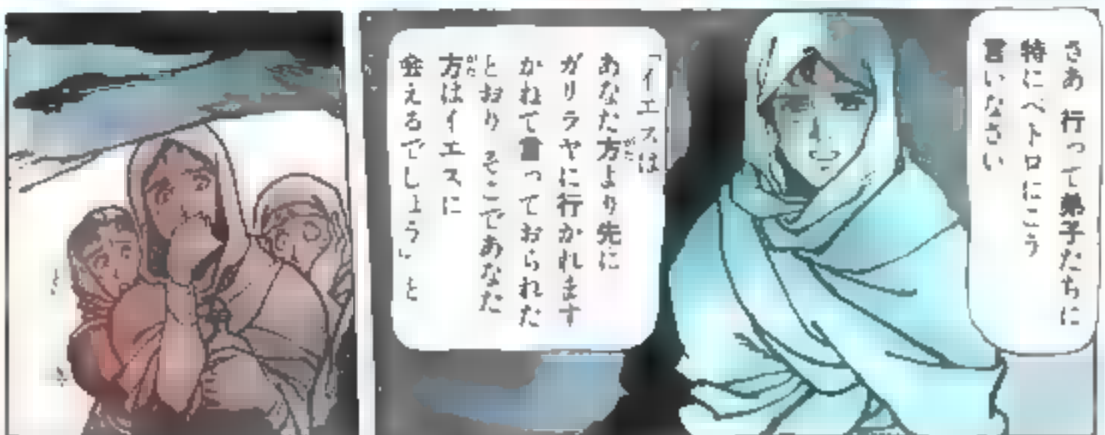
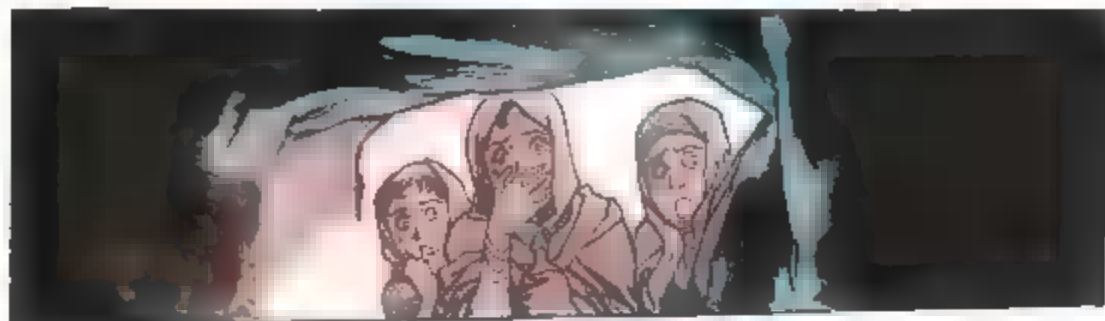
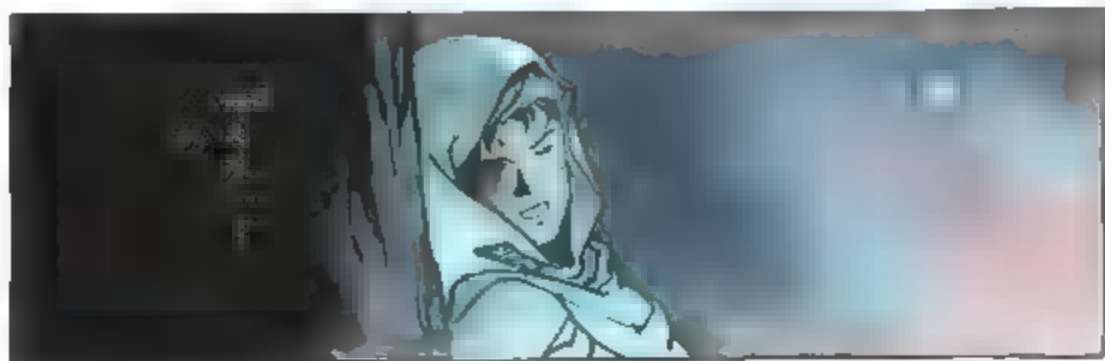
あ

入口が

開いていますよ

まあ
こんなに早い時刻なのに

もう どなたか

見えられて
いるのかしら

（マルコ16・・・ニマタイ28　ルカ24　ヨハネ20）

婦人たちは墓を出て逃げ去った。
われを失うほど恐れおののいていたからである。
そして、誰にも何も言わなかった。
それは、恐ろしかったからである。

――マルコ十六―八――

あとがき

安彦良和

前ページの引用文は、イエスを慕う三人の女性が墓を訪れた時に「白衣をまとった若者」を見たという章の最後の部分です。最後というのは、最も古い福音書とされている『マルコ福音書』が、本来はここで終わっていたからです。現状のマルコ伝はそうではありません。この後にイエスはマリアの前に復活して現れ、弟子達の前にも現れ、それから昇天して「神の右の座」につくのです。これらの部分は「補遺」とされていて内容は写本によって異なり、いずれも後の手でつけ加えられたものらしいということが、普通の聖書にさえ註釈として示されているのは注目すべきことです。なぜなら、事実上の教祖ともいうべき使徒パウロによって立てられたキリスト教の教義の根幹は「キリストの復活を信ずる」ということだからです。

「イエスは、わたしたちの罪の故に死に渡され、わたしたちを正しい者とするために復活されたのです」『ローマ書』。

パウロはくり返しこのように説いています。でも、その説の依っているのが先に示したような頼りないマルコ伝の一節だとしたら、壮大な宗教キリスト教の支えはいったい大丈夫なのでしょうか。マルコ伝の改訂版として書かれたマタイ伝、ルカ伝はさまざまな新しい記述を加え、素朴なマルコ伝をより格調高く書き変えています。その違いのなにがしかが意図的な脚色であることは否定できません。そこでこの物語は主としてマルコ伝と、三福音書とはやや性質が違い、史料的価値も高いとされているヨハネ伝に依ることにしました。コマの外に表記した出典箇所が平等でないのはそういう理由からです。

*

私の父は自称クリスチャンでした。子供達を山奥の家から町の教会に通わせたり、家に牧師さんを呼んで伝道の映写会を開いたりもしました。でも、何故か私だけは教会へも行かず、何かを教わりもしませんでした。小さな時ですから反抗したわけでも、自分なりの考えを通してそうしたわけでもないのでしょうが。

ですから、聖書はいつも身近に在りましたが、それを手にとり、読んだということはありませんでした。キリスト教への関心、共感や違和感は人並み程度以上ではなかったと思います。

「イエスを描こうかな」と思ったのは前作『ジャンヌ』の執筆中でした。ジャンヌ・ダルクという女性のことを考えていくうちに、イエスが避け難い影として立ち現れてきたからです。たまたま同じ出版社から出された高尾利数先生の御著書『イエスとは誰か』が良い手引きとなりました。「描こうかな」は「描こう」に変わりました。

つい十年程前まで、世界は冷戦という陰湿な戦争状態の中に沈んでいました。その不毛な対立は意外に呆気なく終わりましたが、人々はかえって時代をさかのぼったように醜い殺し合いや競争にふけっています。大義も正義も見出しにくくなった分だけ、人間の愚かしい性はいっそうむき出しになったようにさえ見えます。自律的な宗教は古代の賢人がそのような性を畏怖の観念によって封じ込めたものです。しかし、その宗教でさえたちまち争いの種に変じました。自信によって求められた人格が理性以前よりも更に恐ろしいことを、身近に私達は「オウム事件」を通じて知ったばかりです。

*

イエスという人は、よく見える眼を持った良心の人であったと思います。超常的な能力というものが科学的に全否定されていない以上、イエスにそうした能力が無かったとは言いきれません。むしろ、多少はあったと思いたい気さえします。しかし、問題はそのような力の有る無しではありません。イエスが人間の限界や愚かしさを良く識っていたこと、そして、それを戒める教え（律法）の不可避的にはらむ矛盾や危険さ（世俗化と原理主義化）をも識り抜いていたことこそが大事なのだと思います。

イエスは二千年前に生きた情熱的な宗教家です。彼は「自分はいったい何者であるのか」という疑問を宗教的に問い続けます。しかし、福音書の随所に表れるその問いのなんと動揺していることでしょう。時には自問し、時には弟子に向けられるその問いのなんと執拗なことでしょう。「神の子である」と、死に臨んでも断言しておりながら、見えすぎる眼が早くから彼に告知する「逃れられない死」に怯える彼の姿の、なんと弱々しく人間的なことでしょう。

初めて聖書を読む私には、そうした部分がなによりの驚きであり、感動でした。個々の奇蹟のエピソードや、最大の奇蹟である復活の部分はどうでもよいと思えました。いや、どうでもよいどころか、イエスの死後その教えがパウロ達によって復活信仰へとすり替えられたことは大きな間違いの始まりに違いないと思えました。だから私のこしらえたこの物語は、大それた言い方を敢えてすればイエスへの共感とキリスト教への批判の物語なのです。

*

イエスは一人のユダヤ教改革者です。深い思想として改革の方向を説いた教師です。そのイエスをキリスト教という新宗教の化身にしたのは（直弟子ではないパウロを含む）彼の弟子達の仕事です。その弟子達は福音書の中で、絶えずイエスにその愚かさをたしなめられています。ことに高弟のペトロやヤコブは、イエスの最後の夜に至るまで愚かであり続けています。その愚かさの質は世俗的で私達の持つ愚かさに近く、極めて判り易いものです。しかし、そうした愚か者たちによってキリスト教

は形づくられました。
　亡くなられた遠藤周作さんはこの点について「愚かな弟子達がイエスの死に臨んで高められたのだ」と言っておられます。それは違うと思います。例えば殉教という極限の死を彼等の多くが引き受けた事実があるとしても、彼等は決して愚かであることをやめてはいなかったのだと思います。殉教という死は、例え愚かでも盲目的でありさえすれば可能だからです。でも、「良心的で弱い普通の人々の心情」に依拠する遠藤さんは、殉教という強い行為を強く否定することができませんでした。彼は畏れ、悩み、その悩みを小説やいくつものイエス論にまとめあげました。それらの質は世界的に見ても高いものでしょうか、しかし、「殉教」が象徴する強い行いを本来のイエスの教えとは無縁なものとして斥けない限り、弱い良心の美学は理不尽な「強さ」に対する負い目から逃れられず、したがって、ますます自虐的にいじけていかざるをえなくなるのです。

＊

　弱さ、優しさの庇護者が遠藤さんだとすれば、その対極にいるのは田川建三さんです。
　田川さんは学園闘争の頃、既に時代の寵児でした。そのキリスト者批判の舌鋒は、内容の判らぬ私などにとっても何か頼もしく思えたものです。以来二十数年、田川さんの力強さは現在も変わりません。しかし、その論説には不明瞭な箇所があります。イエスと武闘派の問題に論が及ぶ時です。
　イエスの時代に熱心党は存在しなかったと、田川さんは言っておられます。その活動期はイエスの死後三十年以上を経たユダヤ戦争の時期だから、というのです。これは腑におちません。弟子の一人に「熱心党のシモン」がいるからです。それは後世の呼称、と田川さんは言われます。が、考えてもみてください。分裂前の自民党幹事長小沢一郎を党史は「新進党の小沢」と書くでしょうか。
　田川さんが熱心党とイエスの係わりを否定されるのは、イエスが武闘路線の犠牲者だったという解釈を斥けるためです。イエスにかこつけて反権力武装闘争がおとしめられるのがお嫌いだからです。だというのなら田川さんのもまた、為にする議論です。
　熱心党的勢力はイエスを取り巻いていたと思われます。イエスの逮捕はおそらく幼稚な武装蜂起計画の破綻の結果でしょう。そのことはヨハネ伝の一部や、マルコの記すゲッセマネのシーンに暗示されています。
　田川さんが御自身の大学闘争の経験を含めて武闘主義を蔑視されるのは勝手です。あの闘争は大学改良の闘争などではなく大学革命の、ひいては社会革命の闘争だったのですから。しかし、権力対反権力という造反有理的図式が先験的に正しいというのなら話は簡単すぎます。現実には強欲なシオニストが醜いと同様に、無差別テロのテロリストもまた醜いのです。イエスはそのての醜さを嫌悪したはずです。しかし、自身ユダヤ教徒であるイエスは武闘を含めた反ローマの流れを否定できませんでした。確信的な死の予感はそこから来たのでしょう。
　すがりつくような「復活」の預言は、運命を甘受すると心決めた後に、尚残った暗い苦しみが絞り出したものだったと思います。

＊

　最後に二人の人物について触れます。一人目はユダです。
　彼はおそらく「裏切り者」などではなく、れっきとしたスパイだったでしょう。人間的弱さの象徴として彼を捉え、感情移入するのは多分的はずれです。印象的な記述がヨハネ伝にあります。イエス逮捕の手引きをした後、ペトロがもう一人の大祭司と知り合いの弟子にともなわれて大祭司邸へ行ったという箇所です。有名な「ペトロの否認」の一節で、似た記述は全部の福音書にあります。この弟子は既に大祭司への通報が指摘されているユダ以外には考えられません。しかし、後に聖人となる一番弟子のペトロがユダのとりなしで命乞いに行ったなどと聖書に記すわけにはいきません。そこで古代の編者達はいかにも古風のおおまかな手つきでそれをぼかしたのでしょう。こうした不自然な作業の痕跡は、かえって文言の裏にある事実を窺わせてくれます。ユダという極めて打算的な、その限りでは極めて正しい考えを持った男の暗躍ぶりを浮き立たせてくれます。
　もう一人は名前のない弟子です。
　彼のことを編者ヨハネは「イエスの愛した弟子」とのみ記します。これは不自然なことです。文の調子から高弟ではなかったと思えるこの弟子は何故名前を記されないのでしょう。ペトロ達正統派幹部に気がねしたのでしょうか。
　最後の晩餐の席で、この弟子はイエスの胸によりかかり、ペトロに促されて「裏切り者は誰か」とイエスに尋ねます。主人公のヨシュアはここではこの弟子を演じています。
　彼はその後、イエスの遺体を盗み出すのですが、ヨハネ伝の『名前のない弟子』のほうは、イエスの遺言で母マリアを引き取ったり、自分は伝の著者ヨハネ自身だと匂わせたりしています。その辺の真偽はさておき、遺体がなくなったというのはなんだか真実のようです。当のヨハネ伝でもマリアは「死体を誰かが隠した」と、ペトロと例の弟子に訴えていますし、マタイ伝では弟子達がイエスの死体を盗み出そうとしているとか、死体がなくなった後、それは弟子達の仕業だと言いふらさせたとかいった記述がなされています。
　とにかく、本当のことは判らないのです。十二使徒と称されるイエスの弟子達にしても、その実数は不明なのだそうです。してみれば、どのような弟子がイエスの傍にいたとしてもよいわけです。そこで私は名前のない、イエスに愛された弟子の一人に名前を与えました。そして、誰よりもよくイエスの実像と悲しみや怒りや苦しみが判る場所に彼を置きました。彼に血肉を感じ、共感していただければ幸いです。
　なお、作中に描いたエルサレムの神殿は東京書籍発行、アシェット版「世界の生活史」を参考にしました。

一九九七年八月

eBOOKで
快適読書生活

http://www.10daysbook.com/

電子書籍版

イエス
【後編】

安彦良和

Original　日本放送出版協会

Digital Distributor

eBOOK Initiative Japan Co.,Ltd.

〒101-0062　東京都千代田区神田駿河台 2-9-18

http://www.10daysbook.com/

［協力］
高尾利数

［ブックデザイン］
鈴木成一デザイン室

［編集協力］
[illegible]

［引用文献］
『新約聖書』（フランシスコ会聖書研究所訳注 サンパウロ刊）

［装画］
Rosso Fiorentino画「Deposizione」
Volterra, Pinacoteca Comunale 所蔵
（Photo By Scala）

［見返し絵］
「Ultima cena」
S.Apollinare Nuovo, Ravenna 所蔵
（Photo By Scala）